

や小火輪車のやうに、日本に最初の、唯一つの社會的存在で、どの階級にも屬せず、従つて、それだけに寂しい悩みを持つてをつた。

お、コン四郎氏よ、氏は、この點でも、たしかに、「日本の新秩序の始め」だつた！

實際、これまで、いつさいの環境を無雜作に消化して、それぞれの場合に、眩耀まぶしいほど花咲いて來たお吉だつたが、コン四郎館とコン四郎氏とは、さう簡單にはいかなかつた。これまでは、をばさまや、町や、時代の手に依つて、水に投げ込まれると、氷になつて、その都度、周囲の禮讃を獨占した。だが今度は、彼女は、火に抛り込まれて――灰になるかも知れない。

ひと足、コン四郎館の冠木門を潜ると、彼女は、まるで「犬の毛を逆さに撫でたやうな」惡臭にうたれる。さうして、老コン四郎氏の傍へ寄ると、「蟲が脊骨を下る」やうな、人種的の惡感に震へるのだ。それに、第一、疊の上を沓で歩く生活が、彼女のこれまで

のいつさいの生活基準を、根柢からぶつ毀してしまふ。曾つて、彼女は、をばさまのあの、ちりめん磨きの沓脱のある家で、折紙のやうな禮儀を學んだ。いまは、彼女は、棒の如く裾寒くあらねばならない。さうして、寢部屋だが、――つまり老コン四郎氏の居間のあの FUSHUMA の奥――彼女がつましく坐つて、天と地と人に、花を扮るであらう床の間に、うつしすたんの手水臺が載つかつてゐるのは、まあ好いとして、壁に寄せた鐵の柱と木の臺の寢床――それも好いとして、その下に、纏綿縁の疊の上に、綺麗らしく置いてあるあの西洋瀬戸の蓋物――それが、ちゃんぶるほつとの尿瓶とは！此處は、もと、和尚さまの居間だつた。

もし、コン四郎氏が、「日本人のアルコホル漬」の積りで、お吉を、阿墨利加へ持つていくなら、たちまちに、天稟を振つて、にうよるくも、さんふらんせすこも、阿墨利加をみんな、消化して、ある種の華々しい存在となる筈の彼女だが、いまの彼女は、にっぽん最初の和洋生活者で、その二つの生活様式が、彼女の頭の内に、無慚に分裂して、

彼女の足を掬ひ、彼女の溜息を絞りとるのだつた。彼女には、あの坂下の、松風のかげに、丸窓を持つ板葺の家が、コン四郎館と共に、常にあつた。をばさまの、ひつしの氣紛れの沁みついた家——鶴の、涼しい眼を宿した家………をばさまには、しばらく前に、みそはぎの水を手向けたし、鶴は、それ以前に、彼女を棄て、「苗字」を貰ひに、江戸へ發つてしまつた——孤獨の凝つた家だ。

この惱みの上に、ヘロリ以來、「唐人禍」の海嘯を越えて、ずつと、町の陽氣のシムボルにされ續けて來た彼女で、従つて、彼女は、そんな目標を失つた町の失望と、反感と侮蔑とを、當然、引背負はねばならなかつた。

海嘯でいつぱん消えてしまつた町は、持ち前の、先祖累代式な、潜勢力を揮つて、もう殆ど舊態通りに建ち揃ひ、藁の具足も、石と土の鎧も新しく、例の如く、脊低く蹲まつてをつた。そのどの一軒からも、いまや、冷たさと憤りが、彼女へ迫つて來るのだ。

まるで、地獄へ墮ちた亢奮のうちに、彼女は、百五十ポンドのコン四郎氏を包んだ支

那絹の寝巻の火照りを感じた。

「コン四郎は、いま、日本の死命を制してる男だから………」と、そ云つた意味のことを、かうなる前に、海港の第二市長から聴かされ、それに、鶴を失つた諦めと、持ち前の素直な勤勞癖とから、彼女は、初めのうち、文字通り夢中で、この地獄のコン四郎館へ通つた。

あの、コン四郎氏特製の、壯大な、「アメリカカ伯爵」式な乗物を、町の騒ぎの大きさをよゑに、一週間ばかりで廢してからは、コン四郎館詰めの、「五十人のスパイ」組から來る迎へも、自分から斷わつて、獨り町の眼を浴びながら、徒歩で通つた。

その時分は、老コン四郎氏と、フシユマの内の、紫ガラスの燭の灯ん中へ、二人つきりで籠ると、グロテスクな、まるで、悪夢のやうなテタ・テトで——

舌ッ足らずな、量のある聲が、唾の滲んだ唇を洩れて、にぶく彼女の開花耳に震へ、

「おんどる・しよるつ——づろーわるす——しとつけん……」などと、皺んだ大きな指さきが、自分の胸から下へ、そんな實語經式な、教授を獨白したりする。

床の側へひきつけた小卓の上の、保命酒の徳利と切子のグラスを越えて、火氣のやうな息が、ぱつと彼文の高島田の上へ、吹きつけることがある。

両手の掌が、巨大な鳥の足さきみたいに、彼女の肩を掴んで、太い白髭が眼近く來、やがて、くるとあちら向かせ、彼女の領脚に嚙り聲が立ち、それから、彼女のしなやかな指が、燭のま傍で、彼の眼と手と髭に、さんざ弄られる……

完全に没表情な勤勞意識で、彼女は、いつさいの勤めをつとめる。

彼女は、シングル・ベッドの、亂れた毛布と白布を整へて、彼の首もとまで着せる。

彼女は小卓の上を片づける。彼女は、彼の上襦袢や肌襦袢や首卷や、その他の濯ぎもの、繕ひものなどを、ちゑすとをふづろーわるすからとりだして、彼女の締めた緞子の帯の脇に抱へる。片手に、汚れたグラス二つと保命酒の徳利を載せた木の盆。

白髪と白髭の間の皮膚が、點々と紅潮した彼の首が、ふいと「アメリカ伯爵」になつて、傲然とうなづく。彼女は、枕もとの燭を消して須彌壇の方へ通じる唐紙を明けて出、闇い板の間を上草履で渡つて、つき當りの唐紙の中へ這入る。

行燈のともつた日本間。彼女は、汚れものを庫裡への通じ口へ片寄せて置く。彼女は隅の机の上から硯箱と半紙綴ぢの覚え帖を持ち出して、仕立屋へ廻す繕ひものや仕立直し——頭巾、襦袢、下股引などを書きとめる……

やがて、空間を一定の方向へすうと流れて行く物體のやうな、形のきまつた、だが、芯の淡い、そんな感じの、彼女の寝姿を、朝まで、この部屋に、われわれは見出す——やはり、こんな默劇時代の、ある、日の出前のこと。

彼女は、ふとこのコン四郎館の、本堂の前の庭に、何かしら不安な氣配を感じて眼を醒ました。濕つた登音が、四五人入りまじつて聽え、話し聲が低くし、ちよいとしいんとなつたと思ふと、ふいに、悲調の籠つた牛の啼き聲が、ひとこゑ、餘韻をひいて消え

た。それから、急に、何か充ぶつた氣配が、太陽の昇る頃まで、庫裡と庭の間に、つゞいた。

その朝、歸りがけに、彼女が庭を見ると、片傍の露のキラめいた佛手柑の下に、赤黒いものがいちめん地にべたにこびりつき、そちこちに毛屑が散り、それを馬丁が箒で掃いてゐた。

「やつたあ。」と、彼は、刺青の濃い手で斧を打ち下す眞似をした。

そして、そつと顔を寄せて来て、

「大將、食つちやうんだよ。」と、本堂を指さしながら、彼女に囁いた。

彼女は、眼ぶちに薄く蒼味の滲んだ眼を、仰向けて、弱々しく微笑んだ。ろびそん・くるうそう鳩小屋をたつたキジ鳩が、門わきの棒に縛りつけた高い花旗と共に、空に輝いてをつた——

同じ朝。

冠木門の石段を下りて、彼女は、樹立ちと、藁家の間を、いつものやうに、まっすぐに向うを見て歸つてゆく。

「やあ、御苦勞。」と樹立ちの間の藁家から聲がひびく。

例の「スパイ組」の一人だ。そんな風に、皮肉でなしに、彼女へ呼びかける者は、いまの彼女には、この連中位のものだった。

それから五六間いつた時、ふいと、彼女が顔を震はせた。その一軒に、表の刎ね椽にまで、こんな時刻に、人が寄つてゐた。低い讀經の聲が、その闇い家ん中から聴える。死人のあつた家だ。

彼女は、そこに寄つた人々の顔が、いつせいに、こちらへ振り向いたのを感じた。

「ほんとに、葬式も、出せない！」と、いつものやうに、啖のやうな調子が、彼女へ飛んで来た。

彼女は、花旗の下に群れてる藁家に、そんな陰鬱な不平の鬱積してゐることを知つてゐ

た。和尚は須彌壇と一緒に隠居所へ移つてゐるんだし、壇家の墓は、コン四郎館の圍ひ内で、唐人の穢れを浴びてをつた。だから、彼等の家には、骨壺が、いつまでも迷つてゐる、土葬の棺桶は、彼等の菜園のひと隅に、始終不安を訴へてゐたのだ。

彼女は、少し眼を俯せ、忙ぎ足に濱へ出た。そこから、町の入口の渡船場までは、あの岩山の下の濱沿ひの小徑で、彼女は、たゞ——青い島の散つた海を見ていけばよかつた。

やがて、彼女は、あのをばさまに手を曳かれて、「賤しい、怖い、悪い」人々の街を避けて、散歩に來た思ひ出のある砂濱へ來る。

それから、町の前觸れの、渡船場だ。

で、町——北の端から、南の端の、大工町の天邊にある彼女の丸窓の家まで——白眼の冷々と充滿した街。

その町を、今朝は、いつものやうでなく、被布の肩をすぼめて、ほとんど小走りに家

へ戻つた。さうして、肌のものも何も、身につけたものは、いつさい、抛り出して、とり換へてしまひ、頭も、潰して束ね、それから、もつとコン四郎氏を落すために、錢湯へ出かけようとして、ふいと、二三日前、其處で、屯田藝者が、彼女に笑ひながら言つた言葉を思ひ出した。

「お吉さん。お瘦せなすつたね。」

それは、この海港の凡ての女が、唐人に向つて持つ迷信を、代辯した言葉だつた。

彼女は、勝手もとに立つたまゝ、つゞげざまに、茶碗酒をあほつた。で、ふらふらと、裏口から、隣りの、素枯れた姉の家土間を表へ出、坂を下へ、湯道具を抱へて、よろめきながら、下りていつた……

この彼女の「墮獄の亢奮」時代には、コン四郎氏は、彼女にとつては、たゞ臭い、眼の霞んだ、どれを見ても一緒の、唐人でしかなかつた。

だが、そんな亢奮のうちにも、彼女は、いつの間にか、無意識に彼女の明烏のやうに、彼女のえげれす語を呑み込んでしまった。さうしてそれが、次第に、彼女の亢奮を静もらせ、彼女の唐人意識を解し、そしてまたコン四郎氏のうちに、幾分かの「人間」を認めさせた。

彼女は、彼の白子のやうな手の指の運動にも、何か「表情」の潜んでることを知つたし、また、彼のどろんと濁つた眼にも、それを感知することが出来た。随分ぶつきらほうな、彼の手足の動きにも、何處かに細かい氣持ちが籠つてるやうな氣さへするのだつた。

それに、あゝした勤勞癖を持つ彼女で、従つて、この彼への理解は、そのまゝ、むしろ、幾倍かに、彼へひどいいき、その結果が、また、彼女に木魂して、そしてそこに、妙な二人の氣持ちを醸し出した。

人生に、大きな忘れ物をした彼と、「唐人」お吉！

ある夜、彼女は、皮椅子の脊に脱ぎかけてある彼の割羽織を始末しようとして、ふと、その牡丹の穴に、桃色の雛菊が挿さつてるのを見た。

それを、そつと撮みあげて、ベッドの老コン四郎氏の眼の先きへ持つていくと、

「おう！」と上機嫌に微笑み、床ん中から手を出して、それを彼女の指ごと握つて、彼の白髭にこすりつけ、

「これは、アメリカでは、獨り者が戀愛に成功した時に、ボタンの穴に挿し込む。」と云ひ、さて、一層紅々と笑つて、その、説明の英語を彼女に呑みこまさうと、一語／＼始めかけたのだが、どうしたのか、ふいと、花も、彼女の指も、つつ放して、ぎゅつと髭を噛み、いつもの合圖の右手を大きく振つた。

「去け！」

彼女は、汚れ物を持つて、紫ガラスの燭を消して、唐紙を靜に明けて、須彌壇の板の間を渡つて、向うの行燈の部屋へ——だが、其處へ這入ると、急に、よろけ、キスキー

も保命酒も疊に流れ、そんな中へグラスが二つ轉がつた——彼女は、酔つ拂つてをつた：

……

彼女が、あの牛乳を、そつと搾らせて——それは、指の尖へ滴らすと、すうと三日月型に膨れちぢまる、もつとも生の牛乳で、もしかすると、日本最初の、搾乳かも知れない——五勺ほど切子のとむぶろるに入れてすゝめて、老コン四郎氏を悦ばせたのも、以上のやうな氣持ちからで、コン四郎氏は、その返禮に、二十個の琥珀の玉を縫り糸で繋いだのを、そつと、彼女の、首にかけた。

だが、老コン四郎氏は、常に、「アメリカ伯爵」だつたし、お吉は、ますく酒に親しんだ……

恰度、コン四郎氏が、あの、古ストロヴのまほろしに、感慨を深めた時分のこと——

海港に、熱病が流行し、そちこちの低い藁家や土藏家が陰惨な呻き聲を吐いてゐた。

家々の「鬼門」、が頑強に太陽と風に反抗し、小川は、常に濯ぎ場と食器洗ひ場を兼ねてゐる、そ云つた開港場で、従つて、かうした熱病の場合にも、それ相當の陰氣な治療法が、町の人々によつて實行された。

で、此の場合——

藁家の庇の下に、悪魔拂ひの火がチロ／＼と燃え、その煙の隙に、全身のところ／＼が瘤型に隆起した患者が、眼と齒と、骨を氣味悪く際立たせて、呻いて居つた。土藏家の罅口に開いた庇の下には、そんな病人を取巻いて坐つた人々の、手から手へ、大きな、くろすんだ、珠数の球が、鈍く動いてゐた。出來たての、白木の棺桶を戴せた荷車が、街を通る。吸り泣の聲が、ひゞく。海港の生命の船宿や、料亭の騒ぎさへ、途絶え勝ちに低まり、氣紛れな馬鹿騒ぎは、却つてそれだけ、町に鬱陶しさを加へる。

そ云つた雰圍氣に包まれた街を、お吉の、海港獨歩の綺羅びやかな被布姿が、ふらふらと、酔歩を踏んで唐人館へ、通つてゆく。

「ばア！」

コン四郎氏の姿が、駈け寄つて、彼女を抱きあげる。

「また酔つてる！ オキチサン！」

「えい、コン四郎さん。」

「いかん！ いかん！ 酔つて来ちや！ レデイが、そんな、酔拂つて道を歩くなんぞ！」

「かん！ いけない。今日は、歸りなさい。お歸り！ 去ね！」

「はい。コン四郎さん。」

彼女は、立ちあがつて裾を整へ、お辭儀をして、いま出て来た控えの間へ、靜にひき歸す。

老コン四郎氏も、俯向き加減に、もとのカーテンへいき、そこに立ち止つて、そちらを注視する。

お吉は、腰を屈めて、唐紙をあけ、上杓を描へて脱ぎ、こちらへ膝まづいて、そのま

ゝすうと唐紙を閉ぢる。

老コン四郎氏が、さつと、カーテンの中へ消える。大跨に歩く躰音……………

さて、もし、われわれが、控えの間の唐紙を、この瞬間に、開けるなら、われわれは、お吉が、心持ち亂れた足どりで、彼女のあの濯ぎ物や繕ひものなどの覚え帖と硯り箱をとり、部屋の一隅へ動いてゆく姿を、見たであらう。

もしまた、引き返して、カーテンの中を覗くなら、そこに、われわれは、寂しい「アメリカ伯爵」が、聖書を片手で摺んだまゝ、ランプの傍に立つて、ほうと天井を仰いでる姿を發見したであらう……………

(をばり)

下田開港時雜詠

村松春水撰

黒船の秋まだあつき煙かな
つゝしんできけ東海のほとゝぎす

文 三
よみ人しらす

日本は甘いとペロリ舌を出し
水風呂はいゝかもんなりくびつきり

下田海嘯

古賀茶溪

瓦礫は亂れ飛び人は叫びよぶ 俄にきく海嘯の前衝にせまるを 單身抽んで得て東西にのが
る 双刀を除却すれば一物もなし

下田の開港を聞いて

僧 清狂

七里の江山は犬羊に付す 震餘の春色定めて荒涼ならん 櫻花は腥膻の氣を帯びず 獨り朝
陽に映じて國香を薫ず

下田にて

村松青狂

指談と目語と最も寄々なり 喧噪通じがたし缺舌の詞 一たび登船の此地に來りしより 漁
郎は狂げて學ぶ異人の痴

唐人お吉を語る

村松春水

阿吉傳後漫吟百首節錄

春水老痴

牡丹過艶桃燈俗 何物不知當此人 二十四番求品彙
 梅花竹外一枝斜 恰々流鶯春日長 半捲珠簾一人似玉
 博山一縷篆烟香 悄然假坐讀西廂 鷓鴣前頭愁不語 魂斷斑斑舊酒痕
 細笛悠揚銷別魂 碎兩斜風賣酒村 春寒不用火爐烘 香唇吹氣指尖紅
 杏花 傷春賦就備誰寫
 自吹金斗 笑喚鄉々遺半臂
 黃昏 已鎖重門 傷春賦就備誰寫
 自吹金斗 笑喚鄉々遺半臂
 杏花 傷春賦就備誰寫
 自吹金斗 笑喚鄉々遺半臂
 黃昏 已鎖重門 傷春賦就備誰寫
 自吹金斗 笑喚鄉々遺半臂

はじめに

私が唐人お吉の存在を知つたのは、もう幾昔も前のこと、伊佐新次郎先生（ハリス當時の下田奉行支配組頭——明治二十四年没）から聞いたのが最初で、その時に同席した丸尾鎌三郎（舊静岡縣會議員）丸尾興堂（著名の眼科醫）兩君を始め多く既に黄泉、たゞ遠州の美甘光太郎君と、甲州の黒田信太郎君とが今日健在なだけである。その後永らく心にとめ、探り得る限りの文献を探り、やつと近頃になつて、ほどお吉の全傳を極めることが出来た。

お吉は、ハリスとの關係に於て、問題の女であるから、念の爲、その文獻の一部を列擧してみると、前記の伊佐先生の外に、淺岡杏庵老（ハリス當時玉泉寺囑托醫——漢蘭

兼修)、西山助藏氏(ハリス侍僕、眼を疾んでしばらく私の病院に入院してをつた)、領事館掃除係幸助の娘(ハリス當時十歳前後)、お吉の妹藝者だつたお米老婆、お吉の愛護者金平親分(清水の次郎長の兄弟分)の後の、西野屋一家の人々、それから一時お吉の養子となつた安吉君、碓氷金吾氏その他の下田の故老達。それに幕末下田奉行の上申書や、玉泉寺關係の古文書類など――

以上にお吉遺品の數々、たとへば、アメリカ製瀬戸齒ブラシ入れ、切子のコップ、お吉全身寫眞像(明治初年、下岡蓮杖撮影)、白縮緬に蛇の目傘三本を染め出した襦袢、お吉の手蹟(美濃紙に朗詠の詩歌を書き流したもの)などを思ひ合せた結果、大體確信をもつて、お吉の経歴や、氣質や面容、その他を髣髴し得たのであつた。

序に――お吉の墓の由來を一言して、本文に入ることにしよう。

お吉の墓所(投身直後、骨を埋めた處)を探し出すに就ては、私は可なり苦勞をした。初めは見當違ひの大安寺(下田廣岡町)――お吉實家の菩提所を尋ね、それから漸く、

お吉の屍が棺にも納めずに、戸板で下田の式根の奥の野原(下田富士の麓を深く入る)で火葬されたことをきゝ出し、なほ百方搜索の結果、やつと西野屋の乾兒がその世話をしたことだけは判明したが、遺骨の所在は皆目知れぬ。そこで下田中の寺を片ツ端から探し廻つてゐるうちに、ふとお吉の投身當時十五六だつた安吉君を見つけ出し、就て訊くと、同君が、涙を流して、初めて、その時のことを話して呉れた。

それに依ると、お吉の骨瓶は、同君が前記西野屋乾兒と共に寶福寺(下田廣岡町)へ持つて行き、回向埋葬を頼んだところ、手厳しく刎ねつけられ、そこで二人で念佛をとなへながら、同寺の裏にある、藪の側の無縁墓の臺石の下へ入れて歸つた。其後も少し餘裕があつたら改葬してやらうと思つても、日々に追はれて其意を果さぬといふ。私は非常によろこんで、同君の臚氣な記憶を手頼りに、寶福寺の草叢にある無縁墓をそれと搜索し、漸く阿波の船員で安次郎といふ者の墓の臺石の下に、一つの瓶のあるを發見した。安吉君はそれに違ひないといふ。土を洗ひ淨め、瓶の蓋をとつて見ると、悪筆

ではあるが、確にお吉といふ字が薄いながら讀める。そこで雀躍して、改めて寺僧に談判し、境内に今の墓所の地を相し、丁度來遊して居た田中^{まんそう}宗君に相談して、五輪を建てた。始めから入費が四百圓たらずで悉く出來た。

地方の紳士方から挿雲君の「江戸から東京へ」唐人お吉傳のある所を見せつけられて、こんなものゝ墓をたてゝどうする氣だと、大に嘲笑せられた……………

—

お吉は、下田坂下町、齋藤市兵衛の二女、姉をおもとと云ひ、母はおきわと云つた。市兵衛は舟大工であつたが、中風を患つて、起居も不自由、母が走り使や、一文あきなひをして、纒^{むち}に露命をつなぐといふ家計、隣りは母の實家で遠藤與一、お吉は多く其家ではぐくまれてゐた。

是までの下田の史に、お吉を遠藤與一の娘とあるは、このために誤つたのであらう。

或る日新田町の、村山せんといふ老媪から、お吉を養育して見たいとの申込み。

母のきわは大よろこび、自分の實家ではあるが、初^{しよつちゆう}中世話になるは、姉嫁の手前、氣の毒でならぬ折故、孝行で氣性のよい子、惜しくはあるが、評判のよい富有な、村山のお婆さんが、育てゝ下さるといふなら、こんな有難い事はないと、早速に新田へつれて行つたのが、弘化四年の六月。お吉は、天保十二年十一月十日生れだから、七歳の夏であつた。

村山のお婆さんといふのは、下田新田の生れ、十二で孤兒となり、母方が御舟手奉行向井將監の領地の百姓であつた縁故から、本所の向井家へ子守奉公にあがつたが、柔順で誠實な性質は、いたく其のお嬢さんになつかれて、奥方のお氣にも入り、お嬢さんの成長につれて、琴三味線、香花茶まで、お稽古のお相手、覺えがよくて熱心なので、後ちにはお嬢さんの顧問役となり、二十一といふ年には、別して主人の寵が加はり、終にお部屋^{へやま}様の尊號がつく。

やがて奥方の病死、兩三年後には、殿様も易簀、其後も跡目の主人に能く仕ふ、(後の主人は養子なりといふ)若い奥方の後見として、萬端のきりもりをして二十餘年間、平和に送つたが、年をとるに従つて、父母のおくつきをも掃ひたく、強ひてとゞめるを無理にお暇を願ひ、向井家から、永年の忠勤に酬ゆるためと、手廻り道具琴三味線の類は勿論、風呂桶まで、それに莫大の養老金も貰ひ、一門上下の人々から惜別の涙で送られ、下田へ歸つて、新田町の今は醤油藏がたつてゐるが、あの所へ瀟洒な二階家を建て、(下田では珍らしい建物だつたと云ふ)何の不足もなく、乞はるゝまゝに、女子供に読み書き、また娘達や藝妓などに、琴三味線を教へ、のどかに餘生をたのしんでゐたが、何となく物さみしく、よい兒でもあつたらと、思つてゐる時――

大浦のお宮へ參詣の途中、お吉が幼少ながら、病臥の父を團扇であほつたり、腰をたゞいたりするを見て、目鼻立も麗はしいし、引とつて育てあげ、よい氣質だつたら、家をつがせたいなどと考へ、いろいろ教育して見ると、實に慧敏で、十二三になると、女

今川、女大學は更なり、伊勢、竹取、徒然草、はては四角な文字も読み習ひ、特に音曲に別才があつて、江戸で鍛へに鍛へた、お仙老嫗もあきれ程上達した。中でも新内が得意、其上肉聲の美は、今に唄に残つてゐる程であるから想像される。

或時、稽古に来る町家の娘や藝者が、大ざらひを催ほし、お吉も強て床へのぼらせられ、始めて、大衆の前で、明烏を唄つたところ、満座の人が美聲と妙曲に魅せられ、其後はたれいふとなく、明烏のお吉と仇名するやうになつた。(養女となつてお清といつたが、郷人にはやはり幼名のお吉で通つてゐる)

お仙老嫗は、お吉の好評に、夢中になつて喜び、自慢得意の果が、人から追従たらだら、あの咽を他國の者にもきかせたい、下田の名物だなどすゝめられ、遂にお吉が十四の春に自儘づとめ(安政元年)の藝妓にした。

色白の瓜實顔、髪かたち立居まで、下田にはとても見られぬ江戸風、帯も衣物も、お仙老婆の、凝つた好みを現し、従つて海客の話題はいつもお吉でもちきりで、其時分の

効乃が、

おもひ出します、お吉の聲を、(ことをとも唄ふ)磯の千鳥の、なくねにも。

此唄は、今でも下田の人が知つてゐるばかりでない、先年私が鳥羽で老妓からきいたことがある。それに、伊佐先生も、お吉ほどの美人は、三都を探したら二三人はあつたかも知れぬ。然し、あの美聲は、恐らく空前にして絶後であらうと、私どもに語られた。

このお吉が藝者に出た年に、恰度ペルリの黒船が下田へ来て、町中大騒ぎで、唐人は魔法をかけて、人の生血を吸取るから、油断がならぬと、人々が震ひあがつたも無理はない、政府からも嚴達がある。

神奈川沖渡來、アメリカ船八艘、昨今沖出帆、下田港に入津候趣に候、依而異人共上陸、所々徘徊難斗候間、人家戸障子確く切り、店先は勿論、諸商物等取片付け置き人家へ不立入様可致候且又(不明)あり候趣に付き、異人共不見様、取計可申候、尙又女共は、一切不出は勿論、見物の者、不罷出様、精々相制可申候

廻状は、各村名主受印、不限晝夜、刻付を以て繼送り、留村より繼戻し可被返候以上。

寅三月四日

江川太郎左衛門手代

松岡正平

こんな至急の廻状が出てゐる。尙ほ下田町民が、洋人を嫌つたことは甚だしく、一例を示すと、

鈴木武山閣(下田中原町)の前の家で、上記の廻状によつて、戸を閉ぢかためたが、椽臺をとりこむ事を忘れた、散歩に來た米國の水兵が、之に腰をかけて、煙草を燻らしたのを、戸の節穴から覗いてゐた主人が喫驚して、水兵が立去ると飛び出て、

毛唐人が椽臺へ腰をかけた、けがれで何か凶事が起つては大變だ、早く薪割を持ってこい、たゞき壞して海へ流す——と大さわぎをし、そんな新しい椽臺を、と女房が惜しがつて夫婦喧嘩がはじまる。それを武山閣の祖父さんが仲裁役に入り、その提議に従ひ、

結局神主を頼んでお祓ひをして貰つて、危く椽臺の命脈をつないだ珍實話がある。

序ついでだから今一つ、下田人の洋人嫌の例をあげると――

大津浪の時、親を失ひ子を流し、叫喚地獄の様な時でも、魯艦デアナ號の沈没しさうなのを見て、

「ヤツツケロ、ヤツツケロ、毛唐人の船をヤツツケロ。」と手足をふつて、踴躍するを見、自分も遭難狂奔中にも、奇異に感じ、細々と其の状を書いて、伊勢の足代弘訓あししろのりへ、志士松浦多計志郎からおくつた手紙が、今の世に存してある。(私は子爵平山成信氏方を見た)

この安政元年十一月四日朝の、大地震大津浪は、下田千軒をほとんど流し盡し、溺死百十餘人と註せられたが、實際は更に多數であつたらう(他國から入り込んでゐた工夫や、船員の死數は全く不明であつたので)兎も角一瞬時に下田町は、ころころ石の磧かはらとなつてしまつた。

お吉はまだ寢巻のまゝ、お仙老婆を助けて逃げ出し、纔に命だけは助かつたが、衣類

や琴三味線は云ふまでもない、貯金から小遣まで、苟も有形のものは、凡て失くしてしまつた。

お吉の實家は、父は早く没し、姉に婿をとり、お吉からも多少買いでゐたので、昔のやうな、せちからい暮しでなく、それが幸にこの天災を免がれたので、一先づ之れへ寄寓し、曾ては自分が與へた衣物を借着して、飢寒をしのぐ境界に陥つた。お仙老婆の苦痛、またそれを見て小さな胸を痛めるお吉の心情等、推察に餘りある。

このお吉に同情を寄せたのが、後にお吉の亭主になつた舟大工の鶴松で、お吉とは幼馴染、四ツの年上、至極實直者であつた。それが、師匠の傳五郎に預けてある給金祝儀などを投げだして、今の下田小學校の前に、さゝやかな家を建て、お吉とお仙老婆の住居を造つてやつた。

そこへ江戸の向井家から、見舞の金品も届き、二人は、やつと安堵して安政二年の正月を迎へたが、老婆は、氣の弛みから床につき、同じ月の二十九日の朝、遂に鬼籍に入

つた。

お吉は、その後間もなく、家をたゞんで、坂下町の實家へ建増をし、そこを自分の部屋として、も一度藝者となつた。

二

下田が新たに開港場となり、奉行所が出来、缺乏所が出来、缺乏所とは妙な名だが、これは外國船が長い航海で、缺乏した品を補給する所といふ意味である。實際は百貨店で、唯違ふ所は、紙一枚賣るにも、幕吏が立會つて、代金を授受するといふ掟である。之は面倒ではあるが、暴利を貪らせない良法であつた。

そして物品陳列販賣の権利は、下田町民にのみ與へたので、江戸大阪はいふに及ばず府中からも甲府からも、各地の都市から、下田町民に委託販賣。

奉行所は、中村の田地一萬三百六十坪を埋めて新築、其外五ヶ所の見張所、四ヶ所の

關門。

幕吏の往還は、櫛の齒をひくが如く、他國から商人工匠や、志士物好きの者、種々の人が多數に聚る。商船運輸船は、港内に帆檣林立、従つて舟宿の外に旅館も出来る。下田開關以來始めての料理屋、ことに江戸から、わざわざ移轉した、伊勢善、濱田屋の二軒は、江戸生粹きつすいの割烹、伊勢善は今の三丁目の角の菓子屋の所、濱田屋は今の殿小路日進館のところへ開業。(共に安政二年のこと)

潰滅した下田の復興は、意外に早く、刮目の觀を呈して、藝妓なども、三島沼津、中には江戸から、遙々旅かせぎの者もある。

其中でもお吉は、老嫗が、向井家に居た頃から、交際のあつた黒川嘉兵衛が、支配組頭で幅をきかせてゐるので、何かにつけて、奉行所役人は、お吉最良が多く、且つ容色美聲の外に、武家風に教育され、當時にあつては女に珍らしい文字があるといふのも、大さうな人氣であつた。

鶴松は浦賀の叔父が死んで、其の葬式にゆき、あとかたづけや、叔父の受合つた仕事のけりをつけるために、小一年も滞在し、安政三年の十月に下田へ歸つて、久し振りでお吉に逢つた。場所は、料亭濱田屋の一室——お吉が曾つての厚情を心から謝するため、に彼を呼んだので、この時以後、二人の仲が評判になつた。お吉は十六、鶴松は二十であつた。

タウンセンド・ハリスが日本駐在總領事として、下田へ來たのも、此の年の七月二十一日で、修好條約の十一條が、違ふとか正しいとか、色々談判があつたが、結局、通譯兼秘書のヘンリ、ヒウスケンと共に、アセン、アチャフ、アッサン、アロウの四支那人を賄方や小使に連れて、柿崎村玉泉寺に落ちついた。

ハリスの経歴は、讀者の御承知の通りであるが、舊友日置益君の説に依ると、ハリスは失戀の爲め、その痛手を醫せんと遠く東洋まで來たと話してゐたが、委しく聽いて置

かなくて遺憾に思つてゐる。ハリス崇拜者は、お吉侍妾問題に就て、色々と辯ぜられるが、既に米國新聞記者中、錚々たる人々で、私の所へ遠く書を寄せ、

ハリス氏が、貴國にて貴國の婦人を愛したりとて氏の人格に、何等の輕重とはならぬと信ずる、先年バンククロフト大使が下田行の時、此事に付ての談話をさけ、お吉の墓參を見合されたのは、大使の位置と司祭たる立場からである、よろしく諒察を乞ひた

と云つて來てゐる。

ハリスが下田へ來たは、知命を過ぐる二年、思慮も分別も、眞盛りの好年配、此人の純良誠實な性行が、我が國體に、毛ほどの疵もつけずに、すら〜と文明へ進ましめたのだ。聞くが如くんば、日本へ來るまでは曾て紅裙のあたゝかさをしらぬ、枯淡の清生活の人、ところが其の秘書たり、愛友たるヒュースケンは、無類の獵色家であつた。

もつとも我國へ來た時は、春秋わづかに二十五歳、アムステルダムで、千八百三十三

年一月二十日の生れ、氣性は快活、風采は東洋的の色男、それが、多額の月給をとつて、美人郷の下田へ來、其上日本語も少し出來たと見え、案内人に、御苦勞さんなどいふて役人を驚かしたほどで、従つて、彼の内行に就いて、大に恕して好いと思ふ。

況んや勉強篤實、ハリスの友たるに背かず、日本開國の功は、確に幾分をヒュースに頒たねばならぬ。我が同胞ハリスのみを絶賞して、更に氏の功を宣揚しないのは、實に氣の毒の極みである。

ヒュースケンは茶目半分に、まじめのハリスを案内して、下田の湯屋のぞきを實行した。異人の湯屋のぞきは、よくあつたことゝ見え、ペルリの遠征記にもぶんきゅうばん「横濱ばなし」などにも、そのことが記載されて居る。

それが動機となつたわけではないが、ハリスは、心神過勞で、病氣がちであり、優しい看護人を欲する念が加はつて、自ら進んで、侍妾の周旋を、奉行所に依頼するやうになつたので、ヒュースケンも有頂天で、女兩人至急にさし出して貰ひたいと、しきりに

催促したらしい。

幕吏もハリスの強論に辟易し、侍妾でもすゝめたら、多少軟化もすべきかと相談したが、女をおくる説は、先年も出た。時の老中、阿部侯が反對で、消滅してしまつた。但し福山侯は、一般の外人へ對しての反對であつたから、領事だけなら異論はあるまい、などと云ひ合つてる最中に、先方から此の申込みで、この度は早速應諾した。

其時ぜつくわんら舌官等は、ヒュースケンとは、大分に懇意であつたので、若し御氣に召したのがありますかと問ふと、ヒュースケンは言下に答へた。

領事へはお吉、自分へはお福。

一同のものは、女の名まで詳しいに驚いた。

お吉は一流の流行兒はやりこ、彼等も其名を耳にしたであらうが、昨今ひろめをしたばかりのお福をどうして知つてゐたかといふと――

玉泉寺が領事館と定まり、西洋風に假普請をした時（安政三年）其の紙張の分を、請

負つたのが、下田川端の經師屋平吉で、此時平吉の差出した見積書が、不思議にも現存してある。之れあるがために、玉泉寺の何所が誰の間、何所が客間と、同寺の請で私が説明することが出来た。當年をしのぶ葉に、摘記して見ると、

- 一張付 西の内 天井小壁地付 廿四坪 廣間 代 銅錢 六貫四百〇八文
 - 一張付 西の内 天井 四坪 上の間 代 銅錢 一貫〇六十八文
 - 一張付 西の内 天井 四坪 二の間 代 銅錢 一貫〇六十八文
 - 一張付 西の内 天井地付 十坪 居間 代 銅錢 二貫六百七十文
- ヒュースケン部屋

一張付 西の内 天井地付 六坪半 次の間 代 銅錢 一貫七百三十五文
 外に障子七十四本 半障子十七本 以下略。

お福（みやとも云ふ）は、この平吉の養女で、天保十四年卯年八月二日生れ、従つて普請當時は、數へ年の十四。それが、茜木綿の手襷に、鳴海しほりの浴衣を裾短に着て、

職人らに混つて、父の手傳ひをしてゐた。それを工事見廻りのヒュースケンが見て、片言まじりに、いろ／＼話しかける。

直接外人との談話は嚴禁故、平吉は恐縮して、右の趣を掛りの役人に申出で、役人からヒュースケンに、直接の談話をことわると、彼は大に怒つて、他の大工左官等は、請負通りでよいが、これは室内の裝飾になるのだから、請負は請負として、特別に註文差圖が必要であると、頑として應じない、止を得ず經師だけは治外法權——こんな緣故で翌安政四年の侍妾問題の時に、ヒュースケンが、お福の名を即答したのである。

丁度七里以内の出あるき一條、銀貨引替の件などで、ハリスも憤つてゐる。幕吏中にも武士の面目上、一刀兩斷して後ち切腹するなど、忿怒する若侍もある。奉行は大痛心のところ故、女で小康を得られるならばと、老中には事後承諾を乞ふこととして、ハリスの請求通りに約束し、

ハリスにはお吉、仕度金二十五兩、年手當金百二十兩。ヒュースケンにはお福、仕度

金二十兩、年手當金九十兩と定め、大早計にも仕度金は、早く既に受取つてしまつた。
幕吏の内話は、
お福は年も若し、肉體の豊艶な女といふに過ぎぬが、お吉は清楚の風姿にも似ず、男まさりのしつかり者だから、よく云ひふくめて、ハリスを丸めこみ、甘く有利な談判をまとめよう、と云ふのであつた。

三

然し、古今の妙計とたゞへたこの侍妾問題が、意外の事からもつれ出して、下田奉行所の連中を悩ました。いつたい其頃の流行歌の一つに、

ありがたいぞえ唐人さんは、一朱の女郎に二分くれた。(女郎とは私娼で一朱であつた)
などいふのがあり、それからまた、

酒を饗應して、品物をもらつた者、外人の遺失物を猫ばゞきめた醫師、内々で兩替した質屋。

此の三人が當時既に、牢屋に入れられてゐる。

奉行所からは更に、嚴重な布告を出し、

たとひボタン一つ、苘一本なりとも隠置き、後日露見の時は、即時に召取り、重罪に行ふべく候間、女子供に至る迄、急度申渡候。

と毎戸に觸れさせる、此時分外人は上陸さへすれば、必ず子供や娘などに、菓子、筆、貨幣などを與へ、腫物などの出來た者には、膏藥をくれる、極度の心切を示したものである故に、下田や近村の名主から、毎日の様に届書が出る。最も多い時は、一日十通以上になつた日もあつたと、日記にしるしてある、其届の一ツ二ツ

覺

一牡丹一ツ(鉦のこと) 但し亞人 池の町傳八娘りんへ通行中遣し申候

右之通届出に付此段御訴奉申上候 以上

午十月九日

下田町名主

半 兵 衛印

覺

一銀錢 一つ 但し亞人 海善寺ビンヅル尊者賽錢箱へ投込申候

右之通届出に付此段御訴奉申上候 以上

未一月十九日

下田町名主

半 兵 衛印

覺

一女夷人丸はだかの繪 一枚 但し亞人長兵衛娘たかへ通行中申遣し申候

右之通届出に付此段御訴奉申上候 以上

未二月十九日

中村名主

清左衛門印

裸體畫の日本へ初輸入は、安政六年二月十九日であつたと一笑を催した。

それに、山田耕作氏の説に依ると「下田ぶし」の「囃」たとへば、

下田の沖に瀬が四つ、思ひ切る瀬に切らぬ瀬に、取る瀬に遣る瀬がないわいな

右の結尾の「な、い、わ、い、な」の節調に洋樂調が認められる由で、これも、此の時代に起つた現象である。

兎に角かゝる時代に、一妓の身で幾百石の御旗本に匹敵する収入——二十五兩の支度金と百二十兩の年俸を與へるのだから、お吉等に不服のあるべき筈もあるまいし、又土百姓素町人は、一喝を喰はすれば自由になる時故、先づハリスから無雜作に支度金を受け取つておいて、その後、常套語の御用の筋ありで、名主半兵衛同道お吉お福を、役所に呼出して、アメリカ領事館へ、御奉公申付る旨を嚴命した。

ところで、お福はたゞ恐れ入る計りだつたが、お吉の方は、意外にも、稟として勿ね

つけてしまふ。どんなに役人が脅かしても、どんなに名主が制しても、聴かない。その席に在つた伊佐先生の話に依ると、藍氣あゐけの絲織いとに茶緞ぢやん子の帯を締め、顔も姿も、意氣で品のあるお吉が、「いやでござんす。」と最後に、きつぱりと呼んだと云ふ。

で、結局その日は名主預けを申し渡して下げたが、お吉のこの態度は、遂に軟化しさうにない。

そこで幕吏も終に匙をなげ、他の美形を物色して、お吉の代とすることを申込むと、ハリスの立腹は非常である。

今度の件は、一婦人の事とはいへ、日本官憲が萬事に虚言のみで、糊塗するは悪むべき癖である。お吉といふ婦人を、約束金まで受取り、今日は明日はと遷延に遷延した上に、更に他の婦人と交換するなどは、以ての外のことである。斷じてかゝる事は許さぬ。

鼻息が頗る荒いばかりでなく、今迄の不都合を、列擧攻撃して完膚がない。是迄は難

問が起つても、江戸へ指令を仰ぐといふ、奥の手がある。然るに今度の件は、公然中央政府の許可を得ず、便宜上取計らつた小刀細工で、どうしても下田で解決せねばならぬ、其上ハリスから、

「當方で甚だ不便の事件も、大厚意を以て枉まがて、承諾してあげたが、貴方では更に心切を盡さない、かく不人情の貴方に、當方ばかり、懇情をつくす理由もないから、是まで談判済くだりの件も、悉く反古として、更に談判のやり直しをする。」

と、少し無理な横理窟も持込んで來た。

一同青息吐息、若侍の一人が思ひつめて「今は致し方がない、拙者一命を君にさし上げお吉の首を切つて、ハリス方へ持參し拙者も其所に、切腹して申譯を致しませう。」とさへ申し出た。

(此人の名はきいたが忘れた、伊佐先生の話の時、同席してまだ健在である、前記の美甘黒田の兩氏に問合せたが、判然せぬ)

それを聴くと拱手してゐた、伊佐新次郎が始めて口を開き、拙者に少し考へがあるから、成否は知らぬが、是非お任せ下さいとて、自ら進んで此の解決に當る事にした。安政三年の武鑑に、

下田奉行 井上信濃守、岡田備後守。

同組頭 若菜三男三郎、同 松村忠次郎、同 伊佐新次郎。

とあり、又下田の日記に、

卯年三月朔日 曇天南風。

御支配組頭 伊佐新次郎様 昨日梨本村御泊 仲間總代傳三郎御迎。

など記してあり、又其の風采を、乍恐御立派の方とある。

當年四十八歳、和漢佛書に通じ、蘭字も少しは知つてゐて、書は成濟門下の白眉、山岡鐵舟や、高橋泥舟が、自分等は師匠よりも、伊佐に世話になつた方が多いと、能く云はれた程で、それに三味線も巧み、長唄は玄人はだし、さうして後には講武所奉行支配

組頭も勤めた珍しい人物（維新後は、駿河の藤江在で元代議士であつた、青池氏の離れ座敷にゐられ、後に金谷へ移られた。畫家益頭駿南の弟が養子になつたとき。駿遠には遺墓が澤山にあると信ずる。頗る長命で、質問すると、幕末外交の珍談をして聞かしてくれた先生であつた）

伊佐の考案は、お吉の俠な性質を逆用して、納得させようとするのであつた。そこへ又、情人鶴松を説伏せ、彼からお吉に口説かせるといふ、一案を持ち出した者がある。但し鶴松が奉行所の御用を、献身的につとめれば、兩三年の中には、御作事御大工頭の組下にしてやるといふ、交換條件を與へるので――

舊幕時代の、苗字帯刀ときたら、とても今の金鶏勳章や、勳何等の比ではない。鶴松はぢきに動いた。そして手を合さんばかりにして、お吉に迫つた。

今まで、幕吏の恐喝的壓迫や、名主の哀願的強誘や、母や妹のおどくした氣遣ひの中に、たゞ鶴松への一念を守つてゐたお吉の、この時の失望と未練と憤恨と自棄の錯雜

した氣持は、此處に述べるまでもなからう。
そこへ、おあづけ中ではあるが、特別のお計らひで、支配組頭の伊佐様から、是非一酌をとの仰せ、すぐ來てもらひたいと、伊勢善から使が來る。普通なら一も二も斷る筈を、相手が伊佐だけに、出る氣になつたのであらう。

お吉のその時の風が――

髪をかきあげて、条三好みの平打ちのかんざし、無地緋縮緬の長襦袢、下着は利久茶りきうちやに細い群青色の縦横の琥珀、上着は亂達縞のお召、藍ねずみの新流行の毛きらずの帯に、いたこの帯あげ、櫻と蝶と張分鎖の花かんぶくろ、堂島黒塗りの、のめり下駄、葎山様の儉約令に非法の開港地風。

伊佐は、五日市の羽織の着ながし、白博多一本獨鈷どくこの帯をきちんとしめ、卍まんじ字ぢらしの小刀の鞘を、ふくさで拭いてゐたが、お吉の來たのを見て、辭退するを強いて、ほとり近く坐らせ、杯をあげて酌をとらせながら、物柔かに和漢の例を引いて説き始めた。

例の領事館の件が、話題にのほると、お吉の吻邊に、冷かな反抗の微笑をおびて來た。それから蔑如の言葉が、チヨイ／＼批評的に出て、疳癢の筋が額ぬかにあらはれたが、だんだん話の進むにつれて、お吉の態度がつましましやかになり、指を膝に、耳を傾けて聽き入るばかりでなく、時々眼をそつと拭ふ。

果はまつたく小娘に返つた如く、伊佐の前に泣き伏して「參ります、參ります。」と云つた。お吉は、自分と同年で夷狄に嫁した王昭君の故事に、ひどく感動した由で、――後年、伊佐先生は、此の時の状景を涙を浮べて、しみぐと私共に物語られたのである。

四

伊佐の盡力と、鶴松離間の苦肉策が成功して、愈々お吉とお福がラシヤメンになつた。ハリスを神聖視する人々が、私のお吉傳草稿を見て、

「ハリスは嚴格なる清教徒で、且つ責任感の強い外交官だ。お吉を呼んだ所で、たつた一週間に過ぎぬ。」と往々主張せられる。

然し一週間云々は、結局五十歩、百歩で、それが又一週間どころか、下田在寓中、専房の寵をうけたのは、如何ともしがたい事實である。

「日米外交の真相」の著者が、ハリスの小使であつた西山助藏の話として記されたは、虚實相半ばして、頗る人を迷はせる。語る者の誤か、聽く人の謬か。

就中、(1)黒船の來たを見た、(2)ハリスが大酒家、(3)お吉侍妾一週間、(4)ヒュースケン暗殺當時迄お福侍妾、などは全くの誤謬である。

西山助藏は好人物で、老いて眼疾を患ひ、私の所に六ヶ月間居たが、毎日／＼他の患者と、昔の領事館ばなしだつたから、非常に多數の人が、助藏翁の話を聽いてゐる。

——ハリスはお吉が氣に入つて、下田からさへ、自分の駕籠に乗せて往復させたが、見物があまり多いので、お吉からことわり、一週間でやめ、あとはお福と共に日暮に

來て、朝早く歸る。日中は決して置かない、清左衛門といふ家が、二人の休息所であつた。

ハリスもヒュースケンもお酒は好きであつたが、澤山にのめません、ハリスは保命酒を好んで、少しづつ毎日のまれました（これは、下田伊勢町の徳次郎と云ふ家から、六徳利十二徳利と保命酒を買つた受取が残つてゐる）

——などの助藏の談話は、直接にきいた者が數百人にのぼるでせう。それが「日米外交の真相」の著者にのみ、反對に語つたも異なるものである。

且つ「日米外交の真相」著者は、蓮杖の懷舊談をかいてゐるが、此の話も蓮杖が得意にするので、幾多の人が聽いてゐる筈だが、最も精確なのは、史談會で、田邊太一、長岡護美、木村芥舟、荒川重平、戸川安宅、赤松範一其他許多の名士の前で、説話したのであつて、聽者の中には、同時に行動した上役もあるから、少しも虚言はつかぬ譯だ。其話にハリスに就ては、

——ハルリスが騒ぎ立つて、談判するのを怒る役人もあり、額ひたいに青筋を出してゐます。洋銀一枚に一分三個を、此場で目方で交易すると申せしなどは、ハルリスが腹を立て、火入れを取つて襖へ投げつけ、灰神樂が座敷一杯になる。また談判の遅きを怒り、江戸伺ひくと云ひて日數ばかり立つ、若し此方で其様に、アメリカへ伺つたら、百年立つても談判は出来ぬ。

即答のある役人を出せと、申しました時などは、井上信濃守は、袖で灰神樂を防ぎ、身を震はせて怒る他の役人を、袖の蔭にて手を以て静め、刀に手をかけてはならぬと制して居られました。

ハルリスは、此上は戦争だと申し、玉泉寺へ歸り、何と云つても出て来らず、通詞の森山も堀も困り、夜話で慰めたいと、女の話が出て、ヒュースケンもハルリスも妾を求むる意あり、下田は田舎ゆゑ、適當の女がなし、給金は一ケ年洋銀六十枚と云ふことで、土地の藝者を呼び談判せしも應ずる者なし、漸く田菴でんまと云ふ家に、お松お清と

云ふ二人の女の應ずるがあり、異國人と云ふとも、鳥獸にも非すと云ひすかし、私の部屋へ連れ來りなど致しました、アレヤコレヤにて、ハルリスの心もとけ、横濱の談判もすみ、番所調所へも出るやうになり、私も一緒に參りました。——

とある。(お清はお吉の事、お松はお福の誤りか、お松はお福より二月許あとにヒュースケンに侍す)

下に擧げる古文書を見ても、ハリスが自ら進んで可なり強く、侍妾を求め、侍妾の有無が、貴重な談判上に、影響のあつたことを、明かに示してゐる。お吉によつてハリスの興奮した心も鎮まり、日本人の情も了解し、此の感情が、日米國交に作用した點が、必無だとはいへないであらう。

萬延元年十二月五日に、忘年の愛友ヒュースケンが、麻布の古川端で横死した時、英・佛・蘭等の諸公使は、國旗をまいて江戸を引揚げたが彼は、

——唯一暴徒の事である、元より日本政府の知る所でない、世界何れの國か、かゝ



る狂徒なしと云ひ得るか、寧ろかゝる事情の起り易い日本を、憐れまなくてはならぬ——と云つて、泰然と江戸に踏み留まつた。

此の同情に富んだ態度と、前掲の日本人は虚言の權化だと罵つて、火鉢を抛る態度とを比較してみても、これが同一人かと訝るのは、獨り私のみでは無からうと信ずる。

ハリスに此のやうな好感情を生ぜさせた原因は、定めて多々あらうが、後に説くお吉の心盡しも、確に其のうちの一ツに數へ得やう。

序ながら「寶刀難染洋夷血」と、りきむ程の攘夷黨だつた澁澤篤太夫が一變して、開化主義の澁澤榮一となつたのも、ハリスが此の時の至誠に、感激したのが原因である。まことの力はおそろしいものと思ふ。

後年、青淵子爵が、ハリスの墓前に額づいて、

古寺蒼苔秋色深

孤墮來弔淚沾襟

霜楓薄暮燃如火

留得常年錦繡心

今もなほ君が心をおくつきの 夕日ににほふ紅葉にぞ見る

の吟詠も、皆な當時に感じた眞情の流露したものである。

ハリスが侍妾を強請した時に、奉行からの上申書は左の通り——

亞國官吏等召使候女の儀に付申上候、アメリカ官吏ハリス、同通辯官ヒュスケン儀、當表に在任罷在り候に付ては、自然病氣の節、手許に於て看病等、實意に世話いたし呉候もの無之候ては、差支へあり、右は何分男子にては、行届き難き筋に付、女兩人差出しくれ候様、先達中より度々申來候へ共、程よく申斷り、成るべく取あへざる様致し置候所、切迫懇願におよび、速に決答請度段申立候間、追々申立候件々も、當時引合中にて、公私混雜いたし候節につき、右等の引合相濟候後は、勘辨も可仕旨斷りに及び候所、殊の外立腹いたし、別紙申上候境外出あるき外二ヶ條の儀に付き、去る十八日相渡候書付、翌十九日に至り、通辯官ヒュスケンを以て、森山多吉郎方まで差戻し、右は容易ならざる件々も、今般互に別段誠實の廉にて、夫々約諾いたし候儀、然る上は私共に於ても、同様懇篤を盡し、前書女差出候儀、許容これあるべきは、

勿論の儀と相心得候所、ことわりをうけ候段心得がたし、大體不實の所置有之候ては、懇切を表にいたし、懇願の次第は、詰り不承知の儀と、相聞え候由を以て、二ヶ條とも破談の趣き、官吏申きけ候由、ヒユスケン申きけ候、前書渡置候書付は、其まゝ差置き立去候旨、多吉郎申きけ候に付き、勘辨仕候所、元來女差出し候儀は好ましからぬ筋なるは勿論、其上下田町には、未だ晴れて賣女渡世差免し候ものも無く、旁々不都合の次第につき、此上とも強て斷るべきやと存じ候へ共、外に至重の事件等、數廉の引會も有之、且はゆくゆく相拒み候譯にも至りがたき筋と存じ候間、彼の乞に應じ遣し候積評定仕居候内、同二十日、官吏不快に付き名代として、ヒユスケン御役所へ罷越候に付、面會に及び候所、此方より誠實の意を失ひ、兼て内願いたし候、婦人の一件聞濟なき故に、前書の書面も差戻し候儀に候へ共、右一條聞濟有之上は、差戻し候書面へ、私共調印いたし遣し候はば、請取るべく候間、懇願の次第速に許容受度申聞候、餘事と違ひ病氣にて切迫いたし、必至の歎願には候へ共、外の條約濟の國々よ

り、此後差置候官吏へも相響き、容易ならざる筋につき、支配向きへも厚く勘辨評議仕候所、此度江戸表にて、別段仰せ含ませられ候、誠實をつくし應接し候へ共、事情は内願の婦人一條、相整申さず候はでは、誠實の意味貫通仕りかね候趣に主張いたし、品々苦情申立て、何分にも右を差押へ候ては、境外出あるき等の廉も、談判相整候儀まで手戻りに相成り、外取會迄も取纏る期無之候に付き、其筋へ申し諭し、内實船方等の、酒の相手に被雇罷出候女一人、前書看病人の名目を以て、官吏方へ差遣申候。右取計候に付ては、以後軍艦其外渡來の節、官吏同等懇願いたし候ては、以の外に付き、前書兩人に限り候儀の旨、篤と申談候所、彼方にも表立候では、官吏役前に於て、迷惑に及び候間、極秘の筋にて、本國船碇泊中は、決して呼よせ候儀致さざる旨、急渡申出候、渡來の外國人へ右取計等、押移らざる様取締り、夫々勘辨仕候、委細の儀は、別紙申上候件々、書付け取替相濟次第、私共の内一人出府仕候積に付き、其節申上候様仕るべく候 以上。

安政四年五月二十七日

井上信濃守
中村出羽守

この上申書に朱書で

本文通辯官へも同様可差出候所、右者相應のもの無之候に付、いまだ差遣し不申候。とあるが、何か都合があつたと見えて、實際お福は、お吉より三日ばかり遅れて、ヒュースケンに侍してゐる。

お吉が領事館通ひの行列は、大がかりで、ラシヤメン、ラシヤメンと珍らしがり、近郷近在からも見物に來たもので、今も澤山に生存してゐる老人からきくと、

——コンセルさんの大きな綺麗の駕籠へ、煙草盆や何かを置き、脇息にもたれて、悠々と本を見ながら、陸尺にかつがれ、お侍がついてゆく所を見ると、出世の様にも思つたが魔法をかけられて、犬のやうな風をさせられ、精氣を吸取れるかと思ふと、こはくもあり氣の毒にもあつた。

だがお吉さんの綺麗だつたのは、ほんとに繪のやうだつた……

お福とても、同じやうに、これは下田彌次川の土屋氏のかごを借用して乗つた、今も土屋氏の玄關につるしてある、お吉が之を用ひた事も度々ある。

お福は、ヒュースケンに愛せられたが、あまりオボコ過ぎた爲めか、ヒュースケンには、別にお松といふ網代から來た女も出來、二人で彼の籠を平分してをつた。

そこへ、美色はお福より劣り、お松と伯仲の間であるが、小柄で愛嬌のある、片ゑくぼのお小夜が現れて、忽ちにヒュースケンを獨占してしまつた。お小夜は、本郷の農半五郎の娘で、須崎町の伊豆屋の養女、下田特有の職業婦人だつた。

それが、下田の渡船中でヒュースケンに手を握られた由で、支度金が二十兩、月手當七兩二分の書付が残つてゐる。

お松は、横濱開港と共に、そちらへ移り、習ひ覺えたラシヤメン商賣を續けた由。お福はヒュースケン退去間もなく某と契り、一人の子を産んだが天折、それから後は、何

に感じたか無類に堅固の婦人となり、柿崎の野口家に嫁し、婦徳を全うして評判よろしく、明治二十八年十月七日、卵巢腫を患つて死んだ。晩年にお吉の困窮をあはれみ、少女時代領事館通ひの折の、心切に報するためとて、度々衣類など贈つたものである。行年は五十三歳。「誓操淨願法尼」と戒名して、夫の鐵叟晴眼上座と相ならんで、瑞龍山中に安らかに眠つてゐる。玉泉寺へ弔古の人は、米國人の墓の下を、少し奥へゆけば、左手にたゞちに認められるであらう。

序に、お福お松の寵を奪つた、お小夜の事をかいておかう。

お小夜は、天保十三年三月十日生れ、お福より一ツ上で、お吉より一ツ下、お小夜は前記の手當などの書類が残つてゐるので一番明瞭である。

安政五年七月十六日金二十兩、支度金受取、同十七日金五兩二分、特別に化粧料、其後いよゝ枕衾に侍したのが、同八月廿二日、それから起算して、毎三十日に、一ヶ年九十兩を月割として、七兩二分づゝ受取つてゐる。

お小夜はヒュースケン等の東移後、金平親分の妾となり、それが死別、更に道具屋良助の後妻となつたが、不幸にも三十過ぎて又々死別、良助の先妻の子が、三島金本樓といふ割烹店の主婦だつたので、それへ引とられてゐた、其の緣故で、洋妻時代姉さんとして指圖をうけたお吉を周旋して、此樓の内藝者としたことがある。

老後に金本樓破産。血縁である本郷の平井きち方で、明治三十九年六月十七日病歿、行年六十六。(お小夜の姪の眞話に依る)

これでお吉に關係した女の事は、現在知れてゐる限りは、悉くかたづけられたから、再び主人公お吉の消息に戻らう。

お吉がハリスに對して、戀愛の情有無はしらぬが、例の氣性であるから、病中の看護などは、實に驚くほど心切で、數夜衣帶をとかず、勿論横にもならず漂として侍座してをつた由で、只今も健在であるが、當時妹藝者であつたお米老婆が、私に語つたことがある。

——お吉姉さんが、看病づかれて歸つて來たとき、勘ちがひをして、屹度精氣を吸ひとられたのだと思ひ、びつくりして譯をきいたら、姉さんはお腹をかゝへて笑つて、まさかそんな事はない、日本人と同じだよ。だが今度は五六日も寝ずに看病したから其の爲少しはやつれたらう。と云ひました……

お吉が最もハリスに快感を與へたのは、牛乳問題だつたらうと思ふ。

病弱のハリスは常に生牛に執着してゐて（ハリスが牛乳數頭を携へ來つたなど書いてある本は、全然無根の事を傳へたのである。）

幕吏に請求するが應じない。其節の文書に、

牛乳の儀に付滞在之官吏へ及應接候趣申上候。

井上信濃守

岡田備後守

當節滞在罷在候、アメリカ官吏ハリス儀、養生の爲め、相用候由を以て、牛乳渡方の

儀に付、右之者相渡候儀難出來段、支配向の者相遣はし及斷申候、依之其節の對話書一冊相添へ、此段申上候 以上。

又其の談判の大意は、

安政三年八月八日、下田玉泉寺支配調役、森山多吉郎、同下役齋藤源之丞、通詞立石得十郎立會、ハリスとの對話。

此方 此程勤番の者へ、牛乳の儀被申立候趣を以て、奉行へ申聞候所、右牛乳は國民一切食用不仕、特に牛は土民共の耕耘、其他山野多き土地柄故、運送の爲め飼置候のみにて、別段蕃殖致し候儀更に無之、稀に兒牛産まるゝも、牛乳は全く兒牛に與へ、兒牛を重に生育いたし候故、牛乳を給し候儀は一切相成りがたく候間、斷に及び候。ハリス御斷り止を得ず、さらば母牛を求め度く、私方にて搾乳可致候。

此方 只今申入候通り、牛は耕耘外運送の爲め第一のもの故、土人共大切にいたし、他人に讓候儀、決して無之候。

ハリス やぎは有之候や。

此方 近國にて無之候。

ハリス 香港ホンコンより取寄せ、飼育いたし度候。

此方 山間に放飼の儀は相成難く候。

その馬鹿馬鹿しさ、丁寧に書いてはゐられぬ、當時外人への應接が、凡てこんな調子である。

お吉はかしづくと直に、ハリスの牛乳に戀々たるを知つて、馬込の懇意な百姓を、妙薬を鍊ると欺き、多分金を與へて、一合位も搾らせて、ハリスに與へた。此の時のハリスの悦びは非常だつたらしく、

「あの時ばかりは、わたしも、ほんとに嬉しかつた」とお吉が、お米老婆に語つた由。

ハリスは翌日早速奉行所へ、牛乳に付ての抗議的請求、既に證據物件を押へての事だから、従前の様なわけにゆかぬ。牛乳謝絶を大手柄にしてゐた齋藤源之丞が、牛乳にも

女にも皆な自分が關係してゐたから、大に怒つてお吉の許に馳せつけ、血眼で叱りつけたが、却て、お吉から

「私がこのんで、コンセルさんの所へいつたではありません。皆様からのお頼みで、據所なくゆく時に、コンセルを大切に、一生懸命に機嫌をとれ、どんな無理な事を云ひだしても、おとなしく云ふことをきくと、くどくどく、おつしやつたではありませんか、今度足が痛くて寝てゐなさが、どうか牛乳をのみたいが、世話をしてくれといはれたから、此所が云ひつけられた、御奉公のしどころだと、やつと取よせて御機嫌とりをしたが、なぜわるいのです」と逆襲されて、一言も無く、それから老中へも言上する、村々へも命令する。然し搾取法をしらぬので、極々少量しか手に入らぬ。今一表を示すと、

二月十日 牛乳 六勺 大澤村

同 十一日 同 四勺 同

五

お吉の酒亂は、下田界限に鳴りひびいてゐるが、好意を以て解すれば、これには氣の毒な半面がある。生れつき好きであつた酒が、鶴松との別れ話や、名主あづけで、ぐつと進み、いよゝ／＼ハリスに侍することゝなつて、一時大に慎んでゐたところ、是迄明烏のお吉とか、新内お吉とか嬌名の高かつただけに、評判も甚だしい。一寸外出しても、「それ唐人のラシヤメンになつたお吉が來た。」

と子供まで囃したて、夜は四つ道になるかなど、とても耳を掩はねばゐられぬ雑口。誰れいふとなく唐人お吉と緯名おだながつき、酒力でもからねば、お湯にも行きかねる。それに一方、ハリスにも馴れ、つひに一杯傾けて豪を糺おだふが癖になり、いつとなく中毒の域にまで入つた。大酔したら通勤に及ばぬと、ハリスにはれたを幸として、お小夜などが、毎夕親切に誘ひに來ても、頭痛とか持病とかにかこつけて、通はぬ日が多くなつた。

が、給料は多分に貰ふので贅澤三昧、それが酔た時は常識外の事をする。

是は一例で、何年のお正月か分明せぬが、(姉の子を抱いてといふから、安政六年であらう)——屠蘇機嫌の足どりもあぶなく、姉の幼な子を抱いて、隣家へ遊びにゆき、子座が座敷へこす小水をもらしたので、其家の主婦が、いそいで襦袢をとりゆくと、その間に、お吉は、着てゐた縮緬の被風を、邪見にびり／＼引さき、汚れを丁寧に拭いて、くる／＼まるめ、泥溝へ放り込んだ。

この時分、縮緬の被風など云つたら、とても下田界限で見られぬ品、それに女は衣類を大切にする特性があるのに、弊履と一般の扱ひ方、一斑全豹、其の酔狂は想像される。

ハリスは、安政四年十月、江戸入府、翌年春歸館の時、綺羅眼を眩する様な品を、お吉に與へた。私は羽衣の縫箔した帯ときいたが、實際見たといはれる、欣榮翁は、廣い錦だといひ、臼井六兵衛老人は、其品は近郷の豪家の重寶となつてゐると語られたが、今に判明せぬ。是れは是非さがし出したいと思つてゐる。

其後のハリスの活動は、すばらしいが、其中でもお吉らは、依然愛をうけてゐた。其の證據は、安政五年の左の書付を見ても知れる。

覺

一金二兩二朱 御召縮緬 二反

金二兩 同 二反

右之通に御座候 使アサン

午二月廿九日

立野屋源助

立野屋は下田一番の呉服屋である。兩人が重ね着をお揃ひにこしらへたといふ老人の話に符合するから、間違のないことと思ふ。

安政六年には、麻布の善福寺が公使館となり、ハリスも公使に昇進、六月にはヒュースケンと共に、召使の支那人と、幸助、瀧藏、助藏及び馬丁の定吉、喜助も引つれて都入り、九月には領事館を鎖してしまつた。

其後ヒュースケンが、ハリスの意を含んで下田へ来て、濱田屋でお吉と大喧嘩をしたといふ説があるが、私は全く之を信じない、それはハリスなどに關係のない何國かの人であらう。その時、相手のうけた傷を治療した淺岡君が、ヒュースケンでないといふのが何よりの證である。

たゞヒュースケン横死後に、お吉が江戸へ出て、一二ヶ月ハリスに侍したらしく思はれる證據が二つある。

お米老婆は、その頃の記憶を述べて云ふ。——一二ヶ月姉さんの姿が見えぬと思つたら、大層お洒落をして歸つて来て、江戸で遊んで來たと云ひました、これがその一。

次に、雜誌「舊幕府」初卷第三號所載田邊蓮舟の「蓮翁往事談」の一節に、ハリスと安藤對馬守との交情を説き、

——亞米利加公使のみは（中略）獨留りて江戸に在り、其時閣老と雑話の間、ヒュースケンは、初て下田に來りし時よりも、事を共にし、兩人の事は、父子もたゞならず覺

えたりしに、一朝此變に遇ひ（中略）寂莫の懷に耐へず、一人の婢女を雇ひ、聊か無聊を慰ふことを得たしといひ出たることありし、安藤閣老の用意周到なる其ことをき、直に外國奉行に命じ、公使の會て下田にありし際、雇おける婢女ありしを聞けば、今猶そのまゝにあらんには、竊にこれを探りて、これを世話したらんには、その舊歡に再遇すること、大にその意を慰むるに足るべしとて、これを穿鑿せしめられしことは、今記憶する所なり——これがその二。

兎に角、下田領事館閉鎖後のお吉は、恩金の十分なのにかまかせて、豪奢狂態をつゞけ、はては、衣裳器物、貴重品まで轉賣しては酒にかへ、四年めの文久二年には、また藝者に返つたが、此の時、二十二歳、天性の麗質は一點の脂粉もからず、水髪に黄楊の横櫛挿して無雜作にお座敷に出、それでゐて大變な人氣を集めた。

ところが、酔ふと例の始末に負へぬ狂態で、たとへば、當時下田の花柳界で一番騒がれた大盡客、妙見丸の船頭に招かれた時など、煙草入に煙草を詰め忘れていき、船頭が、

「これで買へ、つりはお前にやらう」と、正平草の財布から大札（約一兩、この頃二朱の祝儀さへ上客だつた）を一枚投げ與へると、その態度が癪に觸つたらしく、「はゞかりさま。」と云ひながら、煙草入の底の粉を煙管につめて、札を拾ふや否、蠟燭の火にかざし、その焼ける札から煙草を吸ひつけたといふ。で追に顔色を變へて、それを責る船頭に啖呵を浴せ、さつさと引揚げたのだが、その座には、おとみ、お幸、お安など、當時鳴らした藝者連も招ばれてをつた——

そんな風で、客も次第に無くなり、慶應元年、二十五の年には、遂に下田を去り、その後、明治元年に、横濱で鶴松に出遭はすまで消息不明。

鶴松は、酒も煙草ものまぬ、無口で率直な男で、評判がよろしく、特に伊佐新次郎、若菜三男三郎などは、お吉のいきさつから、身を入れ、その周旋で、江戸日本橋三島屋敷伊丹方に寄り、時の來るをまつてゐたが、萬延、文久と騒がしくなり、唯一の望であ

つた苗字帯刀も、御免になりさうでなく、慶應の末年には、横濱に流れよつて元の舟大工、毎日造船所（後の製鐵所）へ通勤する中に、やはり零落したお吉に逢ひ、終に舊情をあため、横濱元町五丁目の下田長屋（鑛山長屋に似たバラック風の建物だつたと横濱の故老談）に足掛け四年世帯を持つた。

この間、お吉も心機一轉、酒盃に遠ざかり、髪結ひ賃仕事など、家計を扶けてゐたらしい。明治四年お吉が三十一の春には相携へて七年めの歸郷。（横濱本覺寺の當時の住職はお吉と懇意なりし由、尙ほお吉はキツプの好い女との評を某商館の故平井某氏が傳へゐたりと最近分明。）

二人は、下田大工町河岸へ、一家をかまへ、鶴松は河井又五郎と襲名し、町内の信用も厚く、お吉も本場で習ひ覺えた、女髪結を内職、新流行に結ぶのでお得意が多い。

世間からも、マアお吉さんが辛抱人になつた、全く生れかはつたやうだ、やつぱり鶴さんが戀しくて、氣狂になつてゐたんだつたと評せられ、下田町民からも、唐人お吉の

異名が、忘れられるやうになつた。

ところが、お吉の美聲と妙曲を知る人たちは、嫁入りとか、祝筵などで、お吉が手傳に來てゐるのを見ると、無理に引張り出して、一曲と所望する、唄ひ終れば、四方八方から杯が集まる。禁酒しましたと辭退しても肯かれず、ついまた酒癖が出、おとなしい夫の前では、飲まれぬから、自ら進んで宴席へ手傳ひに出かけ、又もとの鯨飲家となり果は徳利をさげては憚りもなく家に歸り、漫言浪語を放つやうになつた。

又五郎が心痛して、醒るをまつて懇諭すると、恐れ入つて其度毎に、禁酒を誓ふが、それも、頻々と亂れ、到頭自分から、無斷で飛び出し、昔し洋妾^{ランヤメン}時代の友であつたお小夜が、三島の料理屋金本樓にゐるをたよつて、そこから、三十六で（明治九年）またく泥水商賣――

又五郎は、人にすゝめられて、萬藏院のおさだ（修驗者の娘）と重婚したが、間も無く、不思議の事に、少しの苦痛の狀もなく、正しく枕もつけたまゝ、眠つた如くにして

頓死した。此の又五郎を檢死した淺岡杏庵氏も、極めて不審してゐられた、それが明治九年六月十五日で、丁度お吉が金本樓で藝者のひろめをした日である。それから十日過ぎて、お吉の實姉もとも病死、葬式に歸つたお吉は、老母の世話をする者がないので、尾州知多郡西端村嘉右衛門の處へ、養子にやつた姉の息勘藏をもらひ返し、母と同居、孝養させるやうにし、毎月衣食の料をおくる事とさだめて、三島へ出稼ぎに戻つた。

此の間にをかしい事は、又五郎の墓地に、化物が出る、又五郎さんは、妙な死様をしたから、何か曰くがあつたのであらうなど、評判が立つたが、それはお吉が、深更人定まつてから、又五郎の土饅頭に詣でて、生前のわびをして回向するのであつた。一生涯ハリスの冥福を祈つた如く、お吉の本性は極めてやさしい、女らしい、やはらかな所があつたのだ。

三島の勤めは、年が年で、道に自分ながら氣耻しかつたと見え、明治十一年に藝妓をやめて、下田へ舞ひもどり、女髮結と三味線の師匠をかね、時に宴會へも出る事が

あり、相當の収入はあるが、隔宿錢は一切もたぬといふ、生活ぶり、二六時中酒氣紛々。ついで明治十三年のコレラ流行の時、一度横濱へ修行にやつた勘藏が、罹病したとの電報をうけ、早速船で横濱へ赴いたが、餘程心が轉倒したと見えて、平生の機敏にも似ず、横濱へ上陸すると、手荷物一切盗難、大困却で勘藏を收容した病院を訪へば、既に死亡後、漸く遺骨を收め、舊知の神奈川本覺寺の僧に、作佛作善してもらひ、又塔婆を建て、遠くハリスの三年忌を修した。

後ち人に語つて

道中で荷物は盗まれる、甥は死ぬ、其の骨瓶を抱へてお寺へゆくと、お寺が玉泉寺に似てゐるじやないか、急にコンセルさんの事を思ひ出し、何んだか悲しくてたまらない。勘藏の一つしよにお経もあげてもらつた。たゞりめによわりめで、わたしも年とつたね。

碓氷翁の話に依ると、いつも酒にくらひ酔て、肌ぬぎのばかりしい姿、それが此時

は、髪を櫛巻にして、小辨慶の着物に、帯をちゃんと結び、旅やつれに瘦せて、初めて剃り落した眉の痕が、青々とうつくしく、切れの長い眼に愛嬌を見せた所は、半四郎のお富を見るやうであつた。

其内に安良里の、大國丸の船頭で龜吉といふ、お吉と遠縁のもので、頗る男氣のあつた者が後援して、大工町に安直樓といふ妓院を開業し、樓主としてお吉を祭りこんだ。
 (明治十五年——お吉四十二歳) 此の樓は今のすし兼の家である。

下田始めての女郎屋、海員船客近郷の若者は更なり、其節は本郷の金平、下田の安太郎など、清水の次郎長、大場の仁三等と、同じく指を折られた博徒が、横行する時であつたから、其の乾兒も多く、随分繁昌した。

同年老母きわが病死したので、今は誰も憚るものはない、宿癖は一層輪をかけて、朝起きて顔も洗はず、酒樽の前に立はだかつて、榊の隅から傾ける。終日亂酔のはてが、けちな遊びをするな、勘定なんどはいらぬ、おれが引受けた、と云つた調子で、算盤を

無視した營業振りで、流行すればするほど、逆比例の損耗、結局四年めの十九年には破産の悲境に落ちた。それでも涼しい顔をして、大工町の下駄屋の横の小家に引移つて、ハリス遺愛の和蘭キリコの杯に、冷酒を満盛して、瘡癩線香といふ、安い赤い紙に巻いてある線香を、三四本ぬき出して、ほり／＼嚼みながら、甘さうに酒をのむ(線香は人體に無害にて、時に保健の効ある由。)時には微酔に、三味線をとつて、得意の仇名草の爪弾き——仇な文句に、仇な聲、仇な音じめに引かされて、一人たち二人たち、狭からぬ大工町通りも、通行がならぬ程であつたは、能く人の知るところである。

かうした生活の果に、明治二十年、四十七歳になつた正月の大雪の夜、俄然として半身不隨に陥り、翌朝になつて、育てゝゐた少女が驚き、近隣へつげたので、平生織物の教を乞うてゐた娘——今の竹の屋の老婆が、第一にかけつけて介抱すると、廻らぬ舌で
 オイ竹屋、とうとう中の字だ。

と平然と笑つたといふ。

止を得ず坂下遠藤の物置に横臥させたが、其後少しく快氣し、人のすゝめで、唯一の財産である、撫育の恩人、村山老嫗より譲られた新田の屋敷、今までは如何な事でも持こたへてゐたのを、遂に六十圓に賣拂つて、小女お仙を伴ひ、吉奈の萬屋へ湯治に出かけた。

滞留何ヶ月かの後、少し快方に向つたが、囊中既に盡き、寒さは忍べども、飢には敵しかね、賃錢先拂の山鴛籠にゆられて、みすほらしく下田へ歸つて來た。

その後、西野屋が、氣の毒におもひ、何かと仕送りなどし、且つ小女のお仙も引取つて、教育もつける、お吉も時々杖にすがつて、舊知故人のなさけに、露命をつなぐと云つた有様であつた。

お吉が此の苦境にある時、安直樓の狂亂以來、更に寄付かなかつた、あの大國丸の龜吉が、之をきいて不便におもひ、水夫に白米一俵を擔つがせて、破れ家を敲き、心配するな、おれが飼ごろしにしてやる、當分これを食べつてゐれば、乞食に出すとも

よ。

と好意を示したが、其の言葉を聴くと、お吉はきかぬ身を起して、菜刀で俵をすたくぐに切つて、米を往來に打まけ——雀よ鳥よ勝手にひろへ——大聲に罵つたといふ。

かくて、明治二十三年、當年五十のお吉は、追に、世のはかなきを觀じたか、ハリス遺愛のコツプを西野屋に贈りなどし、三月二十三日、杖にすがつて、稻生澤川に沿うて上り、門栗の川邊の茶店に憩ひ、壽司をとり、持合せの四錢を差置き、同所を出たが、數刻の後に、同所の門口の主人が、その溺死體を發見した。

お吉は、生前、その境遇の盛衰につれて、時に描金の厨子に、時に蜜柑箱に、諸靈位と共に、ハリスを供養してゐたと云ふが、ハリスの懇切が、痛く心に銘じてゐたと見える。

尙ほ、ハリス遺愛のオランダ切子のコツプは、轉々して下田の醫士栗田氏の藏となつたが、惜しいかな、昭和元年の火災に焼失した。

よくお吉の世話をした西野氏は、目下静岡水落に轉居されたが、同家には前記の如く、お吉の小照もあり、手紙も數通ある筈である。
(をはり)

くろふね耳袋

家藏の寫本、嘉永秘録及び安政秘録中より、黒船に關する
 狂體の文章詩歌句その他を拾ひ蒐め、假に『くるふね耳袋』
 と題して、好事家の清鑑を俟つこととした。

十一 谷義三郎

嘉永六癸丑年七月中西北の方に見なれぬ星出る。

星の説

天文の事はいざ知らず、此度出る星を見るに畫ける屁の如し、されば放屁星共いふべき
 なん、放屁おもんばかりなければ必ずくさき無禮あり、とは唐歌にも、放屁千里惟民の
 止る處をいへり、屁くさい延命五穀成就(んか)ぶ(ん)長久天下泰屁の星なるべし。
(ムシビ)

君が代やくさきも靡く放屁星

×

水戸平

手當りが荒いとて上つかたは御嫌ひなされましたが、火にも水にも大丈夫で御坐り升か
 ら此節は一ばん御用ひなされます、尤も御好み次第唐日本の模様にあらず何國の嶋にて

も自在に織出し升。

福山縮緬

一寸見が至つてきれいで手障りがやはらかで御坐り升から、御女中様かたは別して御好みなされましたが、此節のから風に逢ひましたから、段段ちぢみあがつてさめました。

川越平

随分丈夫向御徳用向の品で御坐り升が、度度の土用干にて餘程よわりが見えます。

會津糸織

きら／＼するとして御嫌ひの御方も御坐り升が、一體よりがよくかかりましてをりますから、大丈夫で御坐り升。

石河郡内

見付きは至つてよささうで御坐り升から、皆様御用ひなされましたが、一體地合があまり細か過ぎますから、此頃はよこれがよく見え升、羽二重まがへでも値安ものゆゑ横

ざけがいたし升。

石見太織

俄に仕立て出た所は立派で御坐り升だが、から風に逢ひましたら直に色が替り升たさうで御坐り升、兎角織色でなければ役にたちません。

川路木綿

むかしはいたつて下直で御坐り升だが、奈良大坂でさらし、いろいろ工風いたし升て、時節にあふやうに、だんだん、もやうを織り出し升故、直段も高くなりましたが、是もすぐに横ざけが致しさうで御坐り升。

戸田かなきん

甚だ地細で御坐り升だが、小紋地がよいとて御用ひなされましたが、是もから風に逢ひまして、ひたとよわりました、早く表を替へませんと浦賀よわりませう。

蕪山紬

見かけから大丈夫で御坐り升が、地ぶとでふしがあるとなされまんだが、此節に至つて甚だ流行いたし升、是は當時新形おらんだ模様をよく工夫して織り出し升から御坐り升。

筒井織

見分けは至つてよく、地合もこまかで御坐り升が、もとまやかしもので、何と申す品やら一向わかりません、夫に年數ものゆゑ横ざけがいたし升、唐仕出しの物で御坐りませう。

戸川めいせん

是は随分丈夫さうで御坐り升たが、鹽風に二度逢ひまして最早裾もよわかりました。

諸大名嶋

これはいろいろ御坐り升、常常白いも、此節は青くなり、赤くなり、眞黒になつて一向無智のも御坐り升。

阿蘭陀まがへケイヘル織 大筒の事

當時甚だ流行にて皆皆様がおめし遊ばし升ゆゑ、富坂並赤坂の御召しかた種が嶋荻野小紋、武衛格子杯へ皆かはりまして、此織もの斗り御用ひで御坐り升けれ共、是は織もともたしかにわかりませんから、心ある人はめしません、鳥渡見ばかりで、實は手よわきもので御坐り升、しかし此節のかんばんにはよろしう御坐り升。

織本

機本

かう注文が替つて來ては甚だ困ります、つねづね丈夫向はわるいとて、地細に手ぎれいに、たたみさはりをよく、織り出しました處が、此節は地太で、にら山紬のやうでなければ賣れがわるう御坐り升が、是は、にはかに出來ません、はた元から並んでは、どういたしませう。

上下をつめて異國の洗ひ張り

天下變之一

惡事第一

師曰阿蘭而外習之不亦惡一乎有亞墨自遠方來不亦苦乎水戸不聽而不慍不亦軍師一乎

武器甲冑

勇子曰其爲人也剛勢而好殺彼者多不我好殺彼而好爲番者未受合也軍師務本本立而事生剛勢也者其爲陣之本歟師曰黃金米穀少矣貧老中曰吾日省吾身爲獨謀而不忠乎與狡夷交而不貧乎許而不信乎師曰納獻上之金省事而信節用而化人募民以時師曰妻子入則勞出則涕憐而仁等拜主而近陣組有與力一則以學軍子憂曰儉儉買武具二備不貶能竭其力一向海而能出其火一與合衆交僞而無信雖日未亡彼必請三亡之矣師曰軍師不智則不定主隱密無通不似已舟止則勿憚改騷子曰慎奢施多貧毒歸富貴矣至變問趣向曰西夷至二於

是邦也必言其願一禁之歟抑與之歟趣向曰富主臆病狂狷姓以畏之富主之恐也其諸異二人之恐之歟

師曰父在聽其概一父沒觀我行一來年不辱父之跡一可謂孝矣獵師曰例之船和爲貴船頭之術斯爲善惣體由之有所無據知和而和不以計伐之亦不可從也勇士陣近於火一人可死也將陷於計一蒙一耻辱也夜不失其守一亦可功也師曰武具師欲無知飽物無賣安德於業一而苦於人一就騷動而笑焉可謂好惡也已趣向曰貧而無貯富而無武器一何如師曰非也未若貧而謹儉而好兵者一也趣向曰日云如切如刺如突如破其我之謂歟師曰趣也早可與出師也已告諸答一而知對者師曰不患一人之不武知一患不解一也

新案酒氣曰飛多一篇古傳得童子之僻中一矣余讀詳之其文愚而雜其論卑下而無條理一蓋出放蕩諸豎之偽撰一也雖然往往又有切時病者則今訂正而不敢公一也焉讀者以三其言之觸忌不可忽也

一老翁、此頃羽根田沖へ異船渡來の様子を一見せばやと思ひ、江戸を立ち出で芝浦御殿山荒蘭崎の御固め、まだ築き立ての御臺場を望みて、諸萬人の辛苦いくばくの費へを思ひ數ならぬ身にも御恩澤の深きを感じつつ、序乍らに川崎平間寺に諸厄除大師の尊號空しからずば、かかる異國の災厄をも消除せしめ給へと、佛前にぬかづき掌を合せて、南無大師偏照金剛と唱へ、祈念をこらす中、眠氣を催し、夢現とも覺えぬ數多の人の同じ様に禮拜をなして念じ居たり、其中に
權家の藩中ともおほしき人あり

南無大師偏照金剛 やくたいぢや戰場けんのん

浦賀應接の武士と見えて

南無大師偏照金剛 だまして追従平穩

本牧より江戸へ注進の人と見えて

x

南無大師偏照金剛 舶來人近海測量

爰らに見慣れぬ亞墨利加人も打ち交りて

南無大師偏照金剛 難題の返事を呉んねえ

御固國持大名の大夫と見えていかめしき様にて

南無大師偏照金剛 侍共ウ戦死を悔むな

砲術家と見えて

南無大師偏照金剛 散散ぢや烟硝損耗

漁村の者と見えて

南無大師偏照金剛 止む泊洲船頭困窮

小石川邊の武士と見えて

南無大師偏照金剛 一大事隠居を出してえ

川崎邊の商家と見えて、笑を含んで

南無大師偏照金剛　うるほひちや六郷近所が
 おのおの念じ終りて下向す、しばしありて大師諸人を見送り、投首し玉ひて、ああ悉皆
 凡夫心、謹んで一向いへ共、唱ふる者によりて皆言語の轉變するを思へば、二百有餘年
 太平の化に浴し、漸く武備衰弱せしも此頃の如きは　皇國衰敗の時來るか、今更如何と
 も致し難しと、嘆息なし給ふを見て、老翁おづおづ這ひ出て、佛前に向ひ、傳へ聞く、
 昔、蒙古襲來の時、日蓮大師幡曼陀羅妙法の功力を以て夷敵を破りしと聞く、今かく江
 戸近海、幕府の膝下、碇を下し傍若無人の振舞、羽根田の辨天は女儀の事なり、夷にも
 由縁もあれば出られぬも尤も、目前に亂暴する夷敵を餘所に見給ふ大師の佛慮はいかに、
 あはれ眞言祕密の法力を見せつけ、速に退かしめ給へかしと言ひすがり歎きけるを、大
 師衣の袖を打ち拂はせ給ひて、

馬鹿をいへ空海先にたたずだ

×

吳國へ玉章の文

(高雄の文作りかへ)

夕は海の上の御歸らせいかやと御案事申上候、扱とや遠き波路をはるばるとの御
 通はせ、實に神國の徳をしたひ玉ひて、大筒の玉の御げんに何とやら互の心うちと
 けぬ女子の心のつねの淺ましく、思ひ廻してみぢんの深き底をも淺しとや、はかな
 き糸のもつれより、つれなき事の御別れ、釋迦に臺場の心して、固めにへだてられ
 しみじみ御物語もなう、かこち顔なる我泪、かはく間もなき袖ヶ浦、霞がくれに見
 送りし、君が御船に筒がなく、御歸國のほど神風ねんじ參らせ候かしこ
 返す返す時この替り參らすれば、随分く御身の上御いとひ、また應接もあら
 んかと日(二)筒のみ鑄直し參らせ候鍛冶(一)こ

君はいや米を貰ふて

ほつといき

火煙玉屋内

江 河

しつぽりぬるる

君さまへ

x

秘蘭製法 蒸氣丸

大風荒浪差合なし

大筒み 三十貫目
小筒み 十貫目
こゝろみ 壹貫目より

此薬は第一世の奢を抑へ武備を整へ、諸家の眠をさまし何程年久敷病たるも、一時に數艘向ければ速に騒動する事奇代の大名役也、抑々予が家長崎よりの傳來にして、諸國に試るに其即功神の如し、故に近頃清朝にて専ら流布し人をそこなふ事多し、此度世の人の救のため薬法を擧て、廣く津々々々蝦夷地まで弘るなり、朝夕二心なく一發づゝ用ひて其功ありと知るべし。

薬法用ひやう

唐大黃 參嫌イ 當季 武士 困窮 黄金 才覺

右細末に魯西亞、亞墨利加にてねり合せ用ふ、武備の怠りには小石川の水にて蒸し用ゆ、又は武士を粉にし町家のしほり汗にて用ひてよし。

- 一、滯船の酔目まひ立くらみによし
- 一、異人碇をおろし高ぶるによし
- 一、應接永びくによし
- 一、帆影薄く見え何となく心を痛め疲おどろかるるによし
- 一、臺場の痛み久しくして出來かねるによし
- 一、固やむによし
- 一、浦を返すによし
- 一、小兒空炮もの驚きによし

まつ平 御免 調合所

東都 茨木氏 製

通商所

京都姉小路下ル町

福山伊勢大掾

我後生息

柏屋牧右衛門

右之外諸國船頭通信交易追追出來紛敷候間、能能御吟味之上御求可被下候

x

忠ッ腹

どいつもこいつも耳の穴をくじりあけて能くききやあがれ、勿體なくも忝くも日光様の御掟を破りやがつて、此頃は途方もないたわけきつた、西洋調練なんぞといつて、神國に生れた有難い事を忘れて、畜生國の真似をいい事と思つてしやあがる、其上に御見置とぬかしやがつて、見るから當氣の狐や狸どもが世話は馬鹿なつらをしてしやあがるを大べらぼうのくそだわけども、むやみに畜生の真似をすれば、神國と畜生國を阿部こべ

になるをもしらないか、牧野目からみれば本の氣違ひの寄り合だぜ、今にも本當の事の始ると丹波ほぼづきの様に眞赤にして、猿の様に天窓をかくしてけつを堀田てて逃るだらう、大きなつらをして外では居れども、内では越中ふんどしばかりで大酒斗りくらつて、妻やてかけの久世つにだまされ、右京てんになつてゐやあがる、べらぼうづらな福山も丸山もいるものか、くそが安藝れらあ、ぬせい斗りで治まるものか、西洋の銃陣などとは但馬らねえから、氣の利いたほんの事を知つてゐる者に頼んでするがいいぜ、度々馬鹿ばかりつくして金を遣はす了簡をちつとはしやあがれ、べらぼうな事をさせるから御旗本は段段貧乏になつて、内藤唐茄子斗り喰やあがるぜ、大べらぼうの福山どころか、びんぼう山が紀伊てあきれもすらあ、えい途方もないこと。

x

石見	ねつゝ立
出来合具足	
新山	

アメリカ船ハイナイカ〜 キタカ〜

×

(献立)

滞船

長熨斗 なむ 三方

茶 異國に決而無之大日本山城國宇治銘産別園 正真極上喜撰

日本に無之

阿片

多葉粉盆

吸物

鯛ひれ肉付
肥後長洲三ツ道具

盆

銚子

中皿

はた白幕焼
新しき青串

猪口肴

江戸川鯛
伊豆の蒸味そ
えあましのり
あかし酢

日本膳

焼物	猪口	汁	平皿
川崎ほろ／＼大師濱鹽焼	調練草 ごますりあへ	高島四郎みそ 虎鉄炮 下曾根芋 粉えん株 大筒切	打拂つて見鯛 火どつて 西洋大生椎たけ 田付ぜり 角まへ半べん 古太夫の目 火繩きす

飯	煮物	香物	汁	鱧 隱岐 羽根田
兵糧米	阿波よせ玉子 稲田切身 音入吹のたう	浦賀守口 大みそ漬 澤庵いきり／＼ス切	八升俵つみ入 一朱銀あん 耳塚きくらげ 神風 神馬草	恥かき鯛 いかにも手薄 内海そうめん 苦勞くわゐ 近寄船 いこく艦 見るふさ劔づゝ

水
 縁高
 濃茶
 皿盛菓子
 薄茶
 少しおあひだ

五年母 梨子 鉄玉糖
 伊達和解 六ツの花 花ほら横文字焼
 歸帆まつ風 羅春いたかん 後れへんかん
 パン十 横濱宗徳寺カシデラ 當分朝せんやめ

手當備へ萬端 揃
 油斷の梅の尾園 いくさ 初むかし

臺引場
 飯鉢
 通ひ
 盃
 銚子
 おだやかに 吸物
 中皿
 猪口肴
 湯桶

土手かまほこ しまし 朝から三桝
 兵らうかます 具足師 冥加せん
 江戸前船來の つかぶるん桝
 陣織羽いか 木の芽時大まぜあへ

盃盛

くたん牛旁
帆はしら煮
まるむき
珊瑚樹にんじん

香物
大森合

本牧の鼻まる
見物やたら漬
瓜切

椀盛

あめりかん
走り水
祝砲筒

猪口氷おろしや

替り付重

五十艘あるひは八十艘頃より来るなどといふ
唐のほら吹

盃打

吸物

銚子

鉢付の板かまぼこ
海老洞まる煮
ひし縫鴉やきとり
くはひかた
金海鼠ざね しころ巻
馬刀がら
人真ね
さねあて漬
大さね
白茄子

數盃

盃洗

鉢肴
かぶと鉢

みせん衆仕立
國勝武士澤山
馬荷付立
鉢丸松露
ぶつさき松たけ
小袴土筆

茶碗

い鴨んを身代り
陣笠たけ
揃ひ三ツ盤

差身

後ろだて
水戸板平目
たよりの
細皮作り
旅から船がまた
來るさうだ鯨

猪口

土佐醬油
おいさしたち
おろしや大根
う内海へ入酒
しど大木にならぬうち
からし二葉にて根を刈葉を

ぼはろく
んべん蒸

筒鑄のかすこ鯛
仕還車海老
玉入かます
白鹽敷て

吸物
わん堀部形

シヤカ鱒
蝦夷地こんぶ
琉球こせう

萩焼
鉢

長門鮮印籠卷
異國船厚焼玉子卷
とさくさ乗り交りて
ない人は素はだのすし
熊本さゝ卷
柳川たが 竹たば盛
新せうが

備前焼
鉢

万事大鱈てり焼
早參馬荷
武士數り出しせうか
大あから目厚かさねかじめ
きもつしくわぬ

新鑄立唐銅
鍋

出張むだば
さわがし午旁
さうでござん拵
どうせう

別段御好意仕立に而
すまし

きたへ鰻皮厚重

はりく抜ゑ

ほし大根

當時捨れ武

以上

大日本橋通白銀街三丁目

新徑字武器要正道住

席測量利割肴家

毛皮毛左衛毛

毛ウ毛次第

何方の津く浦く

へも出張仕候

x

御名前がよいからしつかりおしよ

市川團十郎

阿部伊勢守

むだのやうだがなくてならないよ

森田勘彌

兵糧のほしひ

此節はやりますがまだしつかりしないよ

坂東しうか

若侍劍術の稽古

おひとり外の方にはかまはないよ

嵐璃寛

細川越中守

いざといへばしつかりしていいよ

坂東彦三郎

井伊掃部頭

根はしつかりしてゐるが餘り評判がないよ

尾上菊次郎

井戸石見守

年をとつても先其中のおさぶりだよ

市川海老藏

水府の隠居

當れば大當りはづれると大はづれ

市川小團次

新工夫の大筒

何をしてもぬけ目はないがどうもぶいきだよ

關三十郎

江川太郎左衛門

見かけはりつばでもまさかの時の役に立ますまい

嵐吉三郎

品川の御臺場

きれいでしうちもある皆さんの見たがる

坂東竹三郎

亞墨利加の蒸氣船

きれいでまさかの時の役に立ますまい

岩井条三郎

此頃出来る鎧

しうちはあくまでにくい敵役 大谷友右衛門 亞墨利加の副使アハダムス
 當時いざといふといるものだよ 尾上梅幸 袋に納まる大弓
 跡式はしつかりおしよ評判がいゝから 中村福助 新將軍様
 評判がよいからもつとしつかりして貰ひたいよ 助高屋高助 浦賀奉行御二人
 死んでも誰もおしがないよ 尾上松助 先の親玉
 年をとつても藝はしつかりしてゐるよ 中村富十郎 筒井肥前守

×

ありさうでないものは 海防の御了簡
 なささうであるものは 下田の交易
 戻りさうもないものは 打拂ひ
 永續しさうもないものは 諸組の訓練
 永續しさうなもの 異國船の渡來

うそらしいうそは 黒川嘉兵衛下田噺
 まことらしいうそは 防禦の全備
 出さうで出ぬものは 倂の大船
 出來さうもないものは 講武場
 あがりさうであがらぬものは フロシヤの船
 あたらぬものは 大筒的
 丈夫さうであぶないものは 品川の御臺場
 浦賀の大船
 よろこぶものは 大筒の鑄物師
 果報やけのしさうなものは 御臺場の請負

誰も手を出さぬものは
 アメリカの女
 日本の上策
 御殿山
 日本人の鼻
 (もちつと生しておきたいものは 先の親玉
 渡邊 登
 跡へも先へも行れぬ物は
 フランスの返答
 どうなるかしれぬものは
 以後の成行
 (丑寅ものは付) (聖堂より出たるとて異本いろくあり)
 入用なものは
 大和魂
 蘭學の稽古所
 御固め大名
 不用な物は

(一本ニ曰ク)
 「なくてよいものは
 三つの御臺場
 腐儒者の上書
 貯へた義勇
 番船
 祝炮の挨拶
 異人の供をする浦賀與力
 フーチャチンの膽
 被理(ヘルシ)の首
 ほしいものは
 (評略ス以下時時ノ評殆ド省ク)
 おしいものは
 浦賀の焼捨
 (渡邊 登)
 (先の親玉)

たくさんなものは

ふえたものは

少ないものは

やりたいものは

もらひたいものは

方方の隠密

立附をはいた武士

役屋敷の隠密

西洋流の眞似をする砲術者

達識な御儒者

(清廉な御役人)

外國へ打拂の斷り

アメリカへ間者

亞墨利加アフスタラリ金山

へ子チャの船大工

黒坊もやがて入用なり

外國で輯した康熙字典

馬鹿らしいものは

まだしもといふものは

思つた程いかなんだものは

頭をはられた浦賀の與力

ふるへ出した御奉行

栗濱のゲベエル備

高い所の御臺場

異人をはねた馬

番船を斷つた大名

萬次郎

アメリカ銀の位

富津の洲

御儒者の器量

神風

思ひよらぬものでおちをとつたものは 中村と黒川の異人應對

いい事をしたものは

應接方の家來

御用外交易留

川口の名主

杜撰な地球圖の板元

異國落葉籠の賣人

牛痘を植ゑた小兒

掟を守らぬ奉行

異人亂妨の手傳する日本人

火藥取扱人の烟草

海國兵談の板元

和流の鉄炮

長崎の應接

こけ正直なものは

ずるいものは

へうきんなものは

返したいものは

十分なものは

つまらぬものは

交易の儀に關らぬ御老中

大目付

下官唐人の生醉

(佐久間の髭)

(日本になき藥草の種)

浦賀の白旗

香山榮左衛門の貰ひ物

(亞墨利加人は浦賀奉行と思へり)

被理へ病氣見舞

格は下でも下田奉行

御固めで貧乏した大名

焔硝の火で死んだ人

吉田寅次郎

壘の上で考へた海防策

金川の御用宿

浦賀御手薄を申上た先の御奉行

金川から注進の御徒目付

猩々緋の陣羽織

異船見物の咎人

具足師

亞墨利加征伐を願つた浪人

外記流の御祕事

三分二朱の甲冑

長崎番船の大聲

初め吉後凶のものは

うそらしいものは

本當らしく聞えるものは

虚實わからぬものは

重寶なものは

アメリカ人に強姪された與力

後の打拂の被仰出

遙の沖に數多の番船

(高島と萬次郎の出奔)

大道でうるアーダムスの肖像

細川家臣の鐵棒誂へ並に蒸氣船の金物へがし

ぬかぬ太刀の功名

江川の刺違

異人の強姪

ザンギリの風説

御臺場の請負

林の口

不自由なもの

餘計なものは

幾度も仕直せるものは

立消えのしたものは

七口のピストン

金権でない應接方

ハツテイラに乘越された早船

必死の二字

福山の加増

被仰出書

羽倉の上書

神風はなし

牛皮

黒船焼打はなし

利根の糧道

(倭寇朝鮮軍)

期のないものは

附けてやりたいものは

下で憎まれるものは

下でほめるものは

彼から開く戦端

防禦の全備

渡邊登の御免

魯西亞の入津

御役屋敷へ目の玉

退帆へ使者

御臺場の日雇賃をやらぬ受負人

金川で旅籠賃をねぎつた應接方

水戸の船手

早の御注進を引すりこんだ見回り方

彦根の御船手

隠岐家の手當

(大森の固武備不足は是非なし)
土地へ手當能届きたり

わからないものは

海の内外

佐久間の成行

亞墨利加の來ることを秘した量見

香山の立身

岩に書いた文字

以後の有様

林子平

渡邊登

よほくれ武士

阿部の膽玉

古役御勘定奉行の量見

御臺場の入用

見通しなものは

小さいものは

大きなものは

低くなつたものは

日本の鼻

御殿山

(再出)

小さくしたいものは

下田の繩張

大きくしたいものは

以後のまごつき

思召

日本の船

エギリス

焔硝の製法

こはいものは

わけなくこはがられるものは
こはがるものは

蘭學者
知行を取られさうな松前
御用金をあてられさうな町人
千代田問答の作者

よたくれ武士

やれやれやれ騒動出来たよ、抑抑世上の噂を聞きなよ、先年此かた唐人騒ぎで交易交易
其時次第にぬらりくらりと返事をする故、いよいよ圖にのり蒸氣船とは茶にしたあめり
か、吞まれた阿部さん困つた戸田さん、浦賀の御臺場御手薄なりとて初手からいつたに
御爲御益と勘定奉行は自分の勝手、諸人の不勝手少しも構はず上納金をも取らぬの入ら
ぬと、やつさもつさをいつたあげくに、御免と出ぬける棄捐は出ねえの、酒宴はならぬ
の、なんのかのとてむやみにいひ出し、ぬつべらぼんの大べらぼうの大筒騒ぎで、玉が
ないとはたまげた咄しだ、時に書翰はどうしたわけだよ、ちんぶん漢文御評議區區、我
等風情がぐるりと廻つて一見したとて、どうなるものだよ、文武文武と今更騒げど、蜂
にちんぼうさされた同然痛い(と?)もいはれず、かゆい處へ届いた手當も御金が第一、や

れやれ伊勢さんどうしたものだよ、叱りちらした御隠居などを引きずり出して、よい手があるかえ、外にいくらも御人があらうに、江川如きの上書を取り上げ、咽の骨なる浦賀に構はず、鼻の先なる品川あたりへ生海鼠のやうなる入札御臺場一つや二つ拵へたりとて、どうなるものかよ、地の利は人の和するに如かずと、孔子のおぢいもいつたぢやないかえ、まして甲州へ御開きなどとは言語道斷勿體ない、勿體ない、嗜め文句でやつたらよかるに、越中禪の古きれなんぞをひねくりひねくり、さがし出したるこし付文句ぢや、今の浮世は中中いかねえ、權で抑へて徳でなつけな、錢金なんぞは公儀次第でどうでもなること、徳は本なり財は未なり、俺がくの勝手我儘さらりとやめにし、五常を守りて其身其身の業を正しく忠を盡さば、固より尊き日本神國、あめりかおろしやの齒が立つものかよ、急度吹くぞえ神風神風。

營氣のちよぼくれ

×

ヤンレくゝ無法がはやるぜ困つた事だよ、聞いてもくんねえ近頃世の中おらんだ所か、つまらんだらけで訓練させたり、甲冑揃ひの何のかのとて諸人をこまらせ、中より以上は盲揃ひで人氣をそこなひどうする事だよ、治世の世の中馬具も具足も持たぬが人並、元よりないから一家親類かりたりかしたり、損料なんのとどうやらかうやら去年はすんだり、夫から地震でふるひ崩され大金つかつて粗末のこしらへ、西洋鐵砲是も當氣でやらかしくゝ、何でもかんでもさせうとするのもやつぱり當氣で、お坊育ちをすすめちらかし世上の不服にちつともかまはず、つまらぬ蘭學知つた振りにてお鼻にぶらさげ、御威光かぶつてたわ言いふのはたわけた事だよ、あちでもこちでも合藥つづかず、お筒は不足で日向をから手で歩いて仕まへと、ぶつゝ小言をいへどもくゝ、しよことがないからついでの事だと諸方を見合せ、われも當氣で一番やらうと質はち置つたためしも出來ないケールを拵へ、万藏仕方の具足をころして胴亂拵へ出かける有様、つまらぬ夜の中朝から晩まで畜生の眞似して何の事だよ、あんまりべらぼう其上御身置立附わらじ

ですた〜まごつき、轡の御人は油断がならぬと釘貫親子はびく〜さつしやる、なんでもかんでも手筋がなければ賢人君子も蚯蚓も同様あきれた物だよ、部屋住番入臨時の仕事だ吟味のあるのはいつもの事だよ、あんまり氣儘もほうづがあり升、つまらぬ御時節築地の評判、是亦當氣で始めた處が稽古にやなるまい、劍術教授の大馬鹿だわけめ、何にも知らずに勝氣が十分、子供に目を見せ道具はづれを打つたり突いたり、足がらかけては初心をころばし、怪我をさせても平氣なつらつき、兄弟揃つたたわけを見なさい稽古にならうか、初心な者をば嫌つて相手をするのが教授だ、飯の菜にもならない總裁頭取なんどもゐるではないかへ、叱つてやらすば御役が立つまい、猶更本所のぢいさん師範の名目何の事だよ、高祿戴きだまつてゐるのみ御役ぢやあるまい、よく〜氣をつけお弟子のやからがどうけをするのも叱らざるまい、御鎗の御師範さん脛薄あてきは私ごとなり、赤坂奴がお弟子の有様、第一叱つて風儀を直さず其儘おいては役儀が立たない、外に氣をもむお人がひとりでぐづ〜いへどもいふこと聞くない、ふたりのお師

匠が出来たる上には、入りきることにて腹に答へてたんまり幕で引込思案を始めたさうだが、何でも世の中當氣がかうじて片よせ過ぎるとおけちがつきやす、西洋ばやりは只ではない沙汰、そろ〜ハテレン引込思案か當氣がかうじてまつくら闇用心なされよ、鼻をつままれくら闇だつて邪宗になつたらお罰が當るて、なんでもかんでも西洋ばやりはよくない事だよ、松にからんだ藤がはひすり目玉とび出しから口しやべれと、根入か軽石重しはふは〜よしに西洋やめたが一の手去年の地震や諸國の變事も、神の怒よ只ではない事畜生學びは御承知あるまい、片意地はらずに正銘の事ならお物がいつても人氣が落つく、蕃書調べも無益な板面神(いたまへがみ)の祟りが程なく有やす、西洋太鼓はどうした事だよたわけの限りだ、猶更世の中おしつけ替らう、まち高袴に木綿の紋附、上から下まで上下わからぬ、夫もゆるんで絹けが賣れます、ケヘルを抱へて假宅そりもふしやれの限りだ、夫はまだしも端反(つらひ)の裏金冠(うらきんかん)つてそそるは御役にかかはる、二度と二夕度よしにしなせえ、毒害評判うそではないとよ、行列揃へた幽霊咄しも早速きえたり、裏金端

反でおめかけ捜しは呆れた事だよ、假宅そそりは天下の評判、此頃西洋こつそりおやめでいい子の積りだ、だしに遣つた隠居はさとして出なくなつたよ、當氣の横つらはつてやらぬと天下の難澁、少しも御油断ならない御時節程なく替つて中から上にはたり落ちます、夫から又々どんなになるやら、やたらめつぼう騎戦の調練不用の時節と、知らぬ馬鹿者ほうろく叩きや犬追物でも残らず當氣でかためた世の中、誠の時には夫等のたぐひは御役にや立つまい、晝寢がましたよ精氣を養ひ草臥もうけだ、よしにしなせえくその役にも立たぬに騒ぐな當氣の中にもあはれは氣玉ぬかれて死んだに、死なぬは片輪で無益の殺生、困つたたわけが追々ふえるぜ、蘭學當氣も見切つてやめずば罰が當らう、よしにしなせえ、何でもかんでも當氣をこらへて一言いはすにだまつてゐるのが當時の一の手、御油断なさるな御尻がわれ出し、すんと投げられ後悔しやんな、お爲になるべき仕方が有りやす、武家を救ふが何でも肝要、よくくく氣をつけ依怙と我儘おやめが

よからう、此上大變あらうもしれない、神様祈つて諸民を助けて御國の固めを専ら要とすることよけれ、近頃夷國の取沙汰なけれど御油断なさるな、けふにも明日にも來るかもしれない、いざといつたら御氣に入つたる當時の役人、尻をまくつて逃げるが第一、今より支度をそろくしなさい折付目を見て目出度くなりやす。コウイく

やくはらひ

x

ああらうるさいなるさいな、毎年渡海の御馳走に大筒小筒ではらひませう、鐵砲玉かあら玉の春立ち歸る君が代の、一夜あけたる若水を、もらひにきたの、ゑびすども、どうか交易には鳥を、とつけいこうと、ねだりごと、ためしは長き長崎の、とうのねぶりや唐人の、寢言に交る初夢に、寶舟やら、から舟の、浪乗り初めの蒸氣船、碇をオロシヤ、アメリカも、海路はるかか惠方から、ともに入りくる沖の方、浦賀湊を眺むれば、空に帆をのす異國船、陸では固め嚴重に、我神國のいさぎよく、世は磐石の鏡餅、具足

ひらきや勝栗の、勝つて兜を七五三飜り、弓は袋へ、四海浪治まる御代の萬歳樂、先づ何事も七種の、唐出の船の渡らぬ先に、すたとんとんと打ちはやす、折から悪魔の毛唐人、妨げなさんとする處を、伊勢の神風福は内、鬼は外海水底の、逆まく浪へとざぶりざぶり。

x

新撰苗賣

苗や〜とんでも苗 此頃騒ぎの亞米利加船 諸役人中手がらの苗 夫なりおいては身がすま苗 長崎なんぞへ參ら苗 與力や通詞にや取り合は苗 國法いうても用ひ苗 返翰とらにや返ら苗 遠海迄も恐れ苗 奉行の肝玉落つか苗 大名物入たたら苗 みえも氣こんもつづか苗 こはいといふても逃られ苗 寒さで何れも立ち切れ苗 夜中もとつくりねられ苗 思ひかへして氣が利か苗 大筒打つてもとどか苗 先ではちつとも恐れ苗 異人の打つのは留ら苗 御上の御苦勞勿體苗 日日御評議定まら苗 伊勢さん兎角

おあぶ苗 隠居のお世話きまら苗 木綿の紋附水戸も苗 馬具師具足師せはし苗 出來合具足はきたひが苗 今年の火事には盤木が苗 品川御臺場まだ出來苗 出來ても築地がかたまら苗 深川工風の水氣船でも用だだ苗 鐵砲打つにも玉が苗 九曜の勇氣も歌はれ苗 アメリカ咄もまだやま苗 異船見物出られ苗 異船は遠く離れ苗 去年の秋から氣がはれ苗 年が明けても春めか苗 梅が咲いても見ても苗 今年の初午賑やは苗 融通が苗に仕やうが苗 吉原此節お客が苗 芝居見物入りが苗 藝人残らず暮され苗 火事の苗ので普請が苗 鳶人足は喰はれ苗 職人泣いてもおつつか苗 佃徳丸相圖が苗 町打場には稽古が苗 お米上つて下ら苗 兩替屋には錢が苗 今度の一朱は目方が苗 芝日本橋肴が苗 棄捐は中中まだ出苗 札差合點で手は喰は苗 宿屋師がかつて御談きめてもかさ苗手段に手だてが苗 荻野屋武兵衛も間に合は苗 西洋流に火繩が苗 小身簀本具足が苗 申し付けても間に合は苗 張子の具足に火があぶ苗 着類の御書付わるく苗 そこで萬事が心配苗 おろしやの逗留別條苗 加賀五郎兵衛つまら苗 だまつ

てゐるのも知恵が苗 世間一統落付か苗 神風吹か苗是非も苗 五年のおだまし聞入れ
苗 公儀御世話にや抜け目が苗 彼はいふのも勿體苗 隠居の大筒間に合は苗 世間一
統氣遣ひ苗

×

新作老松

抑抑國の目出度き事萬國に秀れ、左右八方の要害嚴重の地取をなして、意恨の色を見ず、
春の趣向の碇をとき勢俄に立籠り、ザイは頻に振りしかば、味方あれをしとめんと、陸
地の方に玉ふ、アメリカ忽ち敗北となり、首をたれ死に重ねこのま透間を防ぎて、其
船をもらさざりしかば味方大儀といふ、御意をおほめ下し給ひてより松を平と申すとか
や、かやうに目出度き松平、水戸公武備の餘慶をば、君に捧げて御安堵の紙の具足や古
皮の鎧兜の金銀修復、とうとうと異國の船うちとる御代こそ目出度けれ。

×

三國けん

おまへ女のやうでお伊勢さん加増がお好きで、とつびきびいのびい、今度唐土交易にて
んてん天下の大さわぎ、圓く納まる隠居さん何のこつた、がやがや書翰和解してくるり
と廻して節儉しよ。

×

應接ぶし

オオイオオイ使節どの其船残らずかしておくれ、小督ヘルリびつくり調練し、いよいよ
船にはいられまい、御固めはしてやろと用意の筒くばり、先に三崎へ参じましよ、やれ
やれ恐ろし御國ちやと皆はなし、波の苦もなく一ト走り、浦賀と江戸との應接わかれの
二つ玉、ポンポンポン。

×

馬瀨ぶし

雨の日に御物見近く「降られて困りきる馬揃「植溜へくり込む六百騎「大筒小筒に馬印
「羅紗猩猩緋の御目付障羽織「黒い装束は皆家來分「大將軍と見ゆるは三番頭「中にも
目立つは白黒の兜「かねを叩かずほら太鼓しづかに金のざい「貫ひし赤飯みやげに竹橋
さして退散す

もののふのもの入りをする武者揃

馬もひんひん人も貧貧

x

下田の冬がれ

ひよんな津浪に

アイウエオ

魯西亞も天窓を

カキクケコ

破船の修復を

サシスセソ

俄に小屋が

タチツテト

二度目の暴風は

ナニヌネノ

やうやう岸まで

ハヒフヘホ

手足は砂に

マミムメモ

船には綱つけ

ヤイユエヨ

とうとう沈んで

ラリルレロ

異人渡つて

ワキウエヲ

x

寛仁大都日本の花咲

常盤津しのぶ賣作り替

すぎにし替うた

過ぎにし夏の水無月夜、願ひはじめと手をついて、船で見合はす顔と顔、にくらしうて
ひげつらで、ほんに思へばいたぶりな、そちののぞみはならぬその、つつしんでゐても

かいられず、みさきでみかんあめりかさなか、あかりやせまいな、なまむぎと、ふねで
こちらへこいできて、つきたわけになつたのは、へろりへろりで江戸ちかく、こゝと
あちらの江戸くらべ、みんなあくびのつらことに、二度のかたりと利をつめて、つか
まくらの神さんが、まもつてあぎようとかん主が、おまいがほんにあし腰は、きかぬと
いふこと、はじめてきいた、ほかのお國の人しらず、船でこはがる、へろりぢやもの、
千代の日本に叶ふぞ、あなたでうてば、こなたでも、うたれうたるる上氣せん、浪にも
まれてうせにけり。

x

寛仁大度日本花唄

常盤津梶原源太作替

晴月樓雷丸

本てうし「聞かずとも舟としれかし末代の去年きやつらが約束も、くればかへさじ水の
中、あめりか變太舟居は判國一の髭武者と皆人毎に去年から、けさ拍子木の仲の町、虚

をあちらの劔筒に買つて具足の直が下り、せめて盗んで賣り附けて、賣りかたげたるう
れないは、折もあちらのべろり職、何とたまらぬ晴れた汐干や加奈川と羽根田もよしや
川崎の、ひよろひよる者で這つてくる、エヘン罷り出でたる者はあめりか變太舟居と申
す盗人にて候、なんぢ共や身に異國の咄をせい、オオ咄さうとも咄さうとも、先づ軍の
ないが合點か去る程に平きの見物拾萬餘人、壹の臺場に詠ける、鑄方の筒は六萬餘挺、
乗り込む野狐青大蛇二つに裂かれてからみ付く、其時べろりが思ふ様、江戸ではなまじ
私がじやまべろりかけぬけ、逗留せんと舟にものらす只一夜幾度もむりな願ひごと、川
崎へとぞよぢのぼる、船頭お水主が沖中へあめりか敵よ逃すなと、本牧下へ取り込めら
れ、劔に鉄砲打ち落され、大笑の姿となり、つい品川の内海へ待ち設けたる問屋場が、
舟と見るより肝つぶし、是いなあ、べろりさん、お前と一盃かう呑だは並大ていの舟ぢ
やない、夏の去年の漕だ時、どこでも春はくるはずと、一度の願は何のその、翌なぐら
りよと瘤にして、こゝらでやるは國急ぎ鐵砲も劔も負仕末、品川女郎衆にやり手さへ、

1.50
2.00
3.00
4.00
5.00
6.00
7.00
8.00
9.00
10.00

お客が無ればばからしい、べろりめうがに叶ひしとお尻をたんとひり捨てて、よそのおろしやへゆかうとは、そりや、なんぼあめりかさんぢやとて強欲男と飛つけば、立腹て突のけ大根あげ、やあ、のろけたり宿傾盛、其手では迄飯もりされ、間ぬけな狼烟で異國ぶし、米喰ふ武士も數數とやら、ことしや具足の當り年、なぞとやつたも、きむづかしい、打拂はれぬ内此方から打出す拍子木ちよんく迄、そりやお暇と漕出すを、いやいや逃さぬ、いやにげる、と六郷川へ弱い者、あもし、どれでござり升、わがお國へ急ぐはたにしの唐人さん、打に打出す大筒は負色見ゆるあちらの黒舟、諸家の早業日本の幾世の千代も末長う、盡せぬ御代こそめでたけれ。

x

新淨瑠璃

時の聲武器の關の戸

かゝる船路の蒸氣船、さしもたいそな筒音を、聞くにつけても身がまへを、おもいお人

はにしきの羽織玉をうてうて人人に、しつついのは大そうに、ある人は金を出し亞墨利加からきた毛唐人、女子見せればにこと浦賀江戸にはひきかへて、くさり帷子袖せばき姿をかくす陣笠や、費へ厭はずどやどやと、濱邊をさして歩み寄る「奉行は固めの武士に向ひ」霧ふれば乗り込み来る黒船もあるかなきかと皆騒ぎける、なんと人人どうもいはれぬ、けんのではないか「なる程左やうでござり升、此霧をはらさして一トあんしんしたらよう御坐りま升と、はなしのうちに毛唐人船の艦先に立ちあらはれ「もうしちと御案内申しませう」アレ人人船より案内があるぞや「ナニナニ案内とは何事ぢやと、人人船にうちむかひ、ハハア貴様は異國ぢやな、此神國へ供をも連れて大勢で此浦賀へは何しに來たのぢや」アイわたしや日本へ交易のもの、どうぞゆるして下さんせいなア「成程交易がしたくばゆるしてもやらうが、手形があるか「イイエそのやうなもの御坐んせんわいなア「手形がなくば交易はならん、ならん「コレ人人そのやうにいはずとも、此應接はさぞ難儀であらう、交易をゆるしてやりやいのう「さうおつし

やればゆるしてもやりませうか、コレ異人俺が尋ねる事があるが夫を一一こたへるか
 「成程、わたしの覺えてゐる事なら、何なりともこたへませうわいなア」まづ第一合點
 がゆかぬ「そりやまあなにかへ」「サアそのわけは」「いつ體そさまのふうぞくは、鼻毛も
 のびた毛むくじやら、かほからむねまでむしやむしやと、又とあるまいお顔つき、お武
 家さん方お屋敷さん、多くの人で見留めたら、只は通さぬ筈なれど、そこを穩便してお
 くは「鐵砲うつどんしようたん、稽古をするやうに若衆が集まり、たいへん騒ぎもある
 まいよ、どうおさまらうか未だ知れぬ、知れぬ「いやとよ我は甲冑をはや、ぬぎすて上
 べには炭をくれるの、只くれるのとおよくしん、唐人の身にてさむらふぞや」「お言葉
 は通詞で聞ゆれど、日本の土地に入り乍ら、なぜその髪をそらぬのぢや、すはだは矢を
 もいとはばこそ、心でわびてゐるわいなあ」「して献上には「毛類なり」「臺場をつくも關
 東の武備「又御固めの口も人數が殖え「知恵もきりやうもなき人が、ためし少きと引
 くや脚絆わらじを買ひあるき、せはしないではないかいなあ「遠目に見ゆる黒船をその

ままおくもいまいましたいと、湊の口をおしひらき、そちへそちへとかへしける。

x

かけ辨慶

けふ思ひたちのりだめしのりだめし歸路をいつと定めん「か様に候者は御書院の番頭一
 柳播磨守御小姓組の番頭赤松新見、酒井對馬守にて候、さても君澤形の御船は伊豆國戸
 田村にて御製造ありしを、此の頃上命により乗試むるにて候、されば我等講武場へ打揃
 ひ、築地より御船に乗りて漕出ししは辰の刻斗りの事なりしが、風十分ならで未の刻下
 りに横濱につき、晝のかれひを相ととのへ、夜こめに浦賀の沖へと急ぎ候「ころは安政
 二年八月廿四日、その夜すみやかに浦賀の湊につくべきに、風聊か吹き來り御船ゆれ
 て力なし「この風の何になるべきぞ、強くならぬ其先に岸によすべき要やある「まだ夜深
 くも武藏の月出るも惜しき江戸の名残、この風いかに吹くとても心痛に及ぶべき、今朝
 の乗出に引かへて只五十人すごとくとさも恐れげに「あがりさぐるや御船に身は定なき

習ひかな「世の中の人は何とも石清水、石清水とはき思ひも神ぞ知る、鏡と高き御蔭を伏し拜みゆけば、程なく旅衣うしほも浪もともに引き、廿五日の朝あけに浦賀の沖に着きにけりつきにけり「御急ぎ候程に之は早浦賀の沖に御着にて候某存知の通り、朝の御飯を申付うするにて候「いかに申上候恐れ多き事にて候へ共、正しくけふは嵐の吹き申すべき様に見えて候、天気もよき今の折柄何とやらん似合はぬやうに候へ共、あつばれ是より浪あれ風恐しく吹き出で、御船もかへり申すべきや、心もとなく候まま、殿原には御上陸あれかしと存候「ともかくも徒目付はからひ候へ「畏つて候去り乍ら御上陸はならぬ御掟にて候へ、御船は波にゆるる共是乗だめしの事なれば、所詮御上陸は叶ふまじく候、其まま水主共に相談申さうするにて候、いかに水主共番頭衆は御船のうちこのまま御坐ある積りにて候「この儘御坐候はばあら思ひよらず、何のため我等御上陸をすすめ申すべき、心もとなきままに申候へども今更詮なし、このまま御坐あらば湊に近う漕入て、御船を守り申すべきにて候「是は思ひもよらぬ徒目付の心得かな、水主共

の上陸せよとすすむるに、御船あやうしともここにあれとはうらめしや、よし今は我が身を藻屑に沈むとも、命の限りうごかしとさこそ思へと、たのみても頼みすくなきは人の心、あら何ともなや候「あらことごとしや候、ただ湊に近く御船をよするが肝要にて候「よくよく物を案するに沖の船は嵐と見留めたるならん、あれ御覽ぜよてんまにて岸邊をさして元船ふな子の乗運きたれり、是風をさけるなり、よくもけふ御船を沖に出さりつと、いかにもまたすあら笑止や風がかはつて候、あの安房嵐、鋸ヶ嶽より吹きおろす嵐すこの御船の陸地に近づくべきやうぞなく、皆皆心中に御祈念候へ「思ひもよらぬ高波に「波よ~~~~~シサレ~~~~~シイ——今の高波は凌ぎて候この上は皆皆覺悟を極められ候へ、衣裳ありては叶ふまじ身輕になりて一同に此太綱に五體をゆひつけ玉へかし「さん候と言葉をかはし去り乍ら、皆皆船にゑひ御船の中は反吐だらけ酒井はひとり上下の口よりへどをつきあげて、鼻もちならぬさまながら誰かは心の付ぬべき「かく高波のしきりにくれば力の限りは防げ共、終に力の盡きたらば船板をたたき

申すべし、船板たかば是までなりと思しめせ「心得たりといふより早く船板たたく音すれば、其物音に殿原は、南無阿彌陀佛と船櫓へ登り出でたるそのさまは、色青ざめて丸はだか、これ西國にて亡びし平家の一門、おのおの浮み出でたるぞや、かかる時節を伺ふに、船板なりしは水主共の船に働く足音の響を聞きて、殿原の驚きたるもことわりなり「今更驚くべからざれども、沖の方より山のかげ來る共、あたりを拂ひうしほをいたらし、悪風を吹きかけ、眼もくらみ心も亂れて、前後を忘する斗りなるは、元船一艘御船をさしてただよひくるやかの船、爰につき當らば必ず御船はくだかれなん」その時水主共少しも騒がず騒がず、棹もち舳もち鎗ぶすまの如く拾八人、足を揃へてうつつの人に向ふが如く、言葉をかはしかの元船の御船に近くよりくるを、押返し祈りのけ、終に流れて彼船の横ざまに流れゆけ、然るに碇御船の碇にからみて、御船を沖の方へと引きゆけば、此儘にては叶ふまじ、碇の綱を打ち切らんといへども、切るべきやうぞなき「今年とりて廿一、水主清八の申すやう、われに脇差かし玉へ、海中に入り碇の綱を切

りとらんと、既に海へと望みしに、闇き夜なれば、たどりつきかたこそなければいかにせん、案ずる程なく御船の帆柱高くかき登り、御船からは其あはひ三間あまりある處を我身をひねり彼船にひらりと飛んで乗り入れば、碇の綱を二刀見事に切つて、その碇ごとの御船のまゝ碇つなぎとめつつ、その水主の手早く御船に乗り戻る、その剛勇のはたらきは、軍哆利須多不動明王(ムシクヒ)も是にはしかじと見えつるに、猶荒浪の追來るを追はらひ祈のけ、又引汐にゆられ流れ、又引汐にゆられ流れて、漸くに浦賀の風治まり、きのふの事は跡しら波、廿七日夕方に、りきみくさつて番頭出し築地につきにける。

泰平の眠をさます蒸氣船 たつた四杯で寝つかれもせず
 唐船が來ると江戸中からさわぎ 見定めもせずはなす銃砲
 古への蒙古の世とは阿部こべで 今度は吹かぬ伊勢の神風
 唐人が昔恐れし神風を 今はあべこべ伊勢が恐れる
 浦賀迄亞墨利加船を餅に春き けふも御備へあすも御備へ
 吸筒もいつしか替はる大筒に 火花を散らす御殿山かな
 細川の水に入りたる蒸氣船 四はい位はたつたひと呑
 陣羽織そつと異國の洗ひ張り ほどいて見れば浦賀大變
 阿べ川も評判よりは味まづく 蒸氣船には劣る御茶菓子
 唐船が早くかへつてよかつたね 又來る迄はよほどおあひだ

アメリカが北で早まり早半鐘 芝は大金上野はぢやんく
 長き世のなまけし武士の皆目覺め アメリカ船の水戸のよき哉
 唐船をあまり茶にして蒸氣船 又もこんろはいやなきびしよう
 日本を茶にして來る蒸氣船 うかされたのか夜も寝られず
 具足より利足にこまる世の中で 腰當よりも願ふ御手當
 異國から御靈前へと蒸氣船 一周忌には急度參上
 鉄砲を向けに異國の軍船も 名主の勝に後は來無く
 大平の四^{ふに}二十人が七八^{なや}ませて 世界十二は六だな物入り
 生涯を氣ら九で霜ふ隠居三 不問七^なさしづでいらぬ五苦勞
 丁大の金で具足の七を出し 半小すれば問^{うら}たえる武士
 む月から氣きさらきはやよひつて 卯の花おとし着ずばなるまい
 唐人の願ひの米を餅につき おそなへばかりたくさんに出來

いにしへは伊勢をこはがる異國船 今は伊勢奴が唐をこはがる
烏羽玉の黒船かへす山おろし やみの夢路の今やさめなむ

(和蘭^{ワラン}狼烟^{ラウエンシャウ}硝)

(和親交易無^ニ歡極。千艘萬勢樂未^レ央。)

君が代は所々にやたらにさされ石の 藁場となりてこけの武士まで

(東岸西岸固遲速不^レ同。蠻夷北使砲開落既昔今年閏秋在^ニ七月^一剩唐人見^ニ三月^一花^コ)

しめのうちに舟は來にけり人々の うりやとやいはんことじやとやいはん

鉄砲の聲あめりかか蒸氣船 やますばいかで春をしらまし

亞加忘歸依^ニ謀計^一損錢勸^レ醉是神風

拂^レ波蒸氣千萬天、隔城應接兩三遍

蠻師名開向敵國、祝炮始結舶扶桑

はなもみなちりぬるころはゆく春の ふるさとへこそかへるへラルリ

御流れはいつに替りてあすか山 かはらけばかりいただきの春

屁はひれど沈香たかぬ世の中に 草木は靡くむさしの原

彼の訓練をみて

鹿を馬といひし世にも思ひきや 人とけものとなさんものとは

ものふといふ名も知らぬものふは けだものふとなりけるかな

ものふもゲベル筒をとらされて 世わたるわざのならぬころかな

ものふも今は弓矢に引かへて ゲベル筒いるあさましの世や

とるもうしとらねばつらしゲベル筒 捨つべきものは勤めなりけり

日本はどんどごんの國になし ^(筒)つつがないうちやめにせいよう ^(西洋)

ものふのもの入りをする武者揃ひ 馬もひんひん人も貧々(再録)

腰刀脊負ふもあやしゲベル筒 もつや筒袖えみしさびたる
 産神の祭りはぶきてえみしらへ 　　こころ賜ものは是や何なる
 ものふの弓矢とる名も今よりは 　　ゲベル筒が家といはまし
 神ならぬ神の子孫のわれなれば 　　こきしが術を何學ぶべき
 あなかなし姿言葉かこころさへ 　　あめりかぶりに移りゆくとは
 いとはれて世に這歩く蟹の子の 　　横ざまかきの文字ぞうれたき
 あめりかのこきしが道は闇なれや 　　こころの人の誰もまよへる

蒸氣船隱居一人りで呑んでゐる
 唐船が來ても日の本筒がなし
 異國から御佛前へと蒸氣船
 新造の築出^{ツキダ}しいやな客をまち
 はがいと草葉のかけで猿がいふ
 日本のかびを異國に洗ひはり
 ヘルリ
 本國で思ひしよりははかがゆき
 將軍
 この頃は征夷の役がいやになり

老中

内所では交易なりときめておき

若年寄

打拂ひなどといひしはしよての事

水戸

五千俵呑んだはおれも不覺なり

溜詰

小理屈をいつてもみだがぬかに釘

御固の諸家

このつぎの出目を今から勘定し

衆耳庵異説評

まだ屠蘇の支度もせぬに御慶哉

隠居ばかりは春めかす顔

井戸ばたの櫻此頃盛りにて

行くに隙なき遠乗の駒

金澤へついたと聞いて目を覺まし

またもうるさし文の御使

親方の女きらひは月に雲

吹はらはせと願ふ神風

菊桐の幕は日護摩に黒くなり

鐘を木にして叩くをかしさ

脱落カクオチをしてもゆきたきお伊勢さん

阿 同 東 世 痢 彼 江 諸 應 老 亞

伊 役 叡 中 癩 里 人 國 對 將 墨

おひやられくる丸山の客

口利け白髪天窓で花を持ち

尻に帆かけて舟のうららか

春の雨隣家も氣らく眠氣かな

さわがしてやつたとペリリ舌を出し

三月になるとお備へかたくなり

阿べ川が甘いとペリリ舌を出し

世は末とはかなき鷹のつめを研ぎ

この手かしはのふたおもてから

大和路にあけらかんとて年の暮

魯竹退
亞同帆

福長關
山岡宿

藤は時えて咲かんとぞ思ふ

歸り花咲いてさくらの奥が知れ

年若けれど見所がある

産神は赤い鳥居にすゑ置いて

蓬にまざつて葵花さく

月星やすみくまも見え透て

濡手であわを掘出した金

迎も今甲斐なき事と跡部悔い

土岐よ時節とあきらめて居よ

船からはいざは問見ん都鳥

隅田待乳も町の地つづき

北向きの井戸の客ゆる遣はるる

村上 佐倉 若生 壬生 泉上 三上 堀伊豆 跡部甲斐 土岐丹波 伊澤美作 町 井戸對馬

蝶の群とぶ日こそそのどけき
寄せ算の勘定あはぬ花の月

池田播摩
勘

閻魔の帳のけさん釘貫

松平河内

加賀居るか居ぬかしらねど蚊やりたく

本多加賀

川路かにさく浮草の花

川路左衛門

珍客に花澤瀉をあしらひて

水野筑後

闇の夜に出る星が九ツ

石谷因幡

能く人のあらを目付けていひたがる

目付

育つたのみで鶴どの大木

鶴殿民部

何もかも一しきかざる八百屋見世

一色邦之

松の木本にたてる隠居所

松平十郎兵衛

よしあしを岩瀬もさせぬ仕着せ物

岩瀬修

氣が永いゆゑ藝が身にしむ

永井玄蕃

大輪の藤は下葉に虫がつき

大久保右近

些か見當が違ひ鷹の羽

浅野一

ぶらさがる藤は風あれなく思ふ

鈴木四郎左

岡部崩して晩の汁の實

岡部駿河

蔦紅葉鉢に植ゑたら奥がなし

松平久之

霞に見えぬ瓜の紋の旗

津田半三

物好きに濱の眞砂をひろひあげ

木村勘

都の事を任せられけり

京

てんの皮やつと集めた金で買ひ

龍野

町町へ出る御觸れきびしい

京町

見かけより智慧の残りて世じのよい

浅野中務

十把からげの巴てうちん

すめらぎのかたじけなくも供奉をして

日本の果まづは大隅

木都筑^{キツツキ}の朽木つついて餌をひろひ

難波の城に采配をふる

石疊^{イシツミ}もはやこころで疊みあげ

鴈なく空に端居するなり

米倉もへらずふえずに長持し

佐田^{サタ}に植ゑた稻の穂が出る

商人は長ふる身上に成りにけり

買つてつまらぬ四ツ目屋の品

尉どのはひとり庵に氣をいらち

岡部備後

禁裡附

大久保大隅

都筑駿河

大坂

上浦

金澤

相良

大町

佐々木信濃

久須美佐渡

不二の裾野ですはまかし喰ふ

能^ノとても甲州金はふゆうづう

唐へ腰さげ辨當でゆく

持前の心荒尾をみせかへて

分別あれど末枯の笹

此頃は浦賀さびしくなりにけり

野生の桔梗鉢に植らん

坪内伊豆

長崎

荒尾石見

川村對馬

浦賀

土岐豊前

一	隱	之	陸	常	成	與	無	地	心	生	更
一	度	出	大	登	城	力	之	愁	菜	之	如
一	調	新	簡	中	夜	婦	夫	歎	青	行	奉
一	無	益	之	周	章	別	近	年	浦	賀	之
一	俄	費	雜	如	引	猶	人	增	悟	犬	死
一	築	臺	場	之	齒	更	哀	本	禦	防	士
一	來	騷	之	櫛	進	注	之	牧	岸	警	諸
一	理	多	願	異	來	交	此	方	海	衛	命
一	國	異	謐	國	東	易	開	恥	辱	諸	侯
一	咄	御	靜	之	船	書	本	日	無	者	制
一	出	代	平	兵	君	翰	其	勢	無	人	人
一	漸	會	太	前	早	早	振	無	若	當	役
一	足	具	之	捧	早	早	逆	無	若	當	之
一	反	古	張	上	陸	劍	逆	禮	傍	所	

指	心	法	放	遣	伊	東	亂	異
居	圖	寢	茂	勢	取	變	國	一
無	海	違	殿	無	輪	船	成	來

御臺場之詩

一各一士一砲一隊一大一巨一備一所一屯一聞一人一反一端
 一用一授一似一止一風一礮一轉一規一出貝一役一笠一練
 一葦一教一鳴一雷一騎一小一機一則一位各一馬一列一調
 一笠一小一田一柳一原一銃一整一既一場一御一開一闢一大
 一揃一最一並一足一地一天一響一今一度一駒一見一置一以一來
 一忍一此一笠一提一總一泉一原一金一小一業一磨一覽一上
 一地一節一合一寄一船一皆一隊一原一叱一光一顯一汰一沙一近

又

一節一此一物一寇一異一巾一頭一組一概一光一顯一汰一沙一近
 一劣一最一上田風形水古無紀州兒島近
 一關一初一可一少一藤一安一野一仲一失一心一子一加一幕一尙
 一宿一昨一今一少一爭一松一坐一感一供一又一內一法

一居一備一內一取一請一春一固一毛一毛一拜一儀一無一求
 一之本一其一來一翰一返一融一通一金借余當手
 一武一歷一古一足一輕一困一窮一家一人之
 一器一鉄一稽一練一之切一來一大一御一難一胃
 一騎一馬一砲一之調一如世留久借金儀甲

野拔隊龍之誌

一鞋一草一令一岡一長一聲一巨一備一所一屯一聞一人一笠一陣
 一別一隊一音一似一止一名一礮一轉一規一出貝一役一列一練
 一種一旗一鳴一雞一行一旅一小一機一則一位各一諸一馬一調
 一色一高田足木村銃整既場御開闢大
 一揃一密一綿一並一地一天一響一今一度一駒一見一置一以一來
 一薩一摩一發一放一宜一中一山一原一金一小一業一磨一覽一上

震減直第來筒福先鬥不止近
大勢可少伊井山平人知主御尙
給昨今少爭先隊友星野何全役威

野真體之詩

顏似普宅假後肥蟄龍所雁通妓娼
國黛請忽傷人形鼠虎本木語蘭屋
芳場成就及江轟如勢漢上姿弘倭
揮武評議及都鼎生先學世西圓一
毫講長最八藤齋花落花開洋砲術
小暖簾甚延引芝春平太政安實實
稻翻玉作丸居土方登樓飛三枚

美名山造市村座行步變代交附見
窮尺陸減輿侯諸司遠笠揃糸切天
下總不動濕深川有乘陣繰釣第六

袴如角兵笠鳥追 劍銃荷肩刀指尻
炎熱調練甚苦勞 堪笑西洋日雇取

足如角兵首鳥追 槍銃負脊脇差芽
炎熱調練尤苦勞 堪笑西洋日雇取



製復許小

發行所

東京市日本橋區通三丁目
振替口座東京七七二〇

萬里閣書房

〔製本 池端製本所〕

昭和四年一月十日 印刷

昭和四年一月十五日 發行

昭和四年一月二十日 再版

昭和四年一月廿五日 三版

昭和四年一月三十日 四版

唐人拵吉 奧附

定價金一圓八十錢

著者 十一谷 義三郎

發行者 小竹 卽一

印刷所 池端印刷製本所

萬里閣書房發行書目録

後藤朝太郎著	支那行脚記	總布木版七度刷裝 四六判四七〇頁	定價二・九〇 送料一四〇
坂正臣校閱	明治大正勅題歌集	紫羽二重表紙上製 四六判三八三頁	定價二・三〇 送料一一〇
永井柳太郎序	帝國議會雄辯史	春皮クロス上製 四六判六〇六頁	定價二・八〇 送料一四〇
鳥居龍藏著	滿蒙の探查	總布ポプリン裝 四六判五五〇頁	定價三・五〇 送料一四〇
鳥居幸子著	小さき家の装ひ	總布金箔入上製 四六判二七八頁	定價一・五〇 送料一〇〇
後藤朝太郎著	支那綺談 阿片室	鳥ノ子木版七度刷裝 四六判五〇〇頁	定價二・五〇 送料一二〇
生方敏郎著	食後談笑	鳥ノ子木版八度刷裝 四六判六四〇頁	定價二・九〇 送料一四〇
清澤洸著	黒潮に聽く	總クロス金文字入 四六判六〇〇頁	定價二・八〇 送料一二〇
メイ・牛山著	近代美容法	總クロス上製 四六判三三六頁	定價一・八〇 送料一一〇
東京日日編 社會部	戊辰物語	鳥ノ子木版十度刷裝 四六判三六二頁	定價二・〇〇 送料一〇〇



卷之十八訂

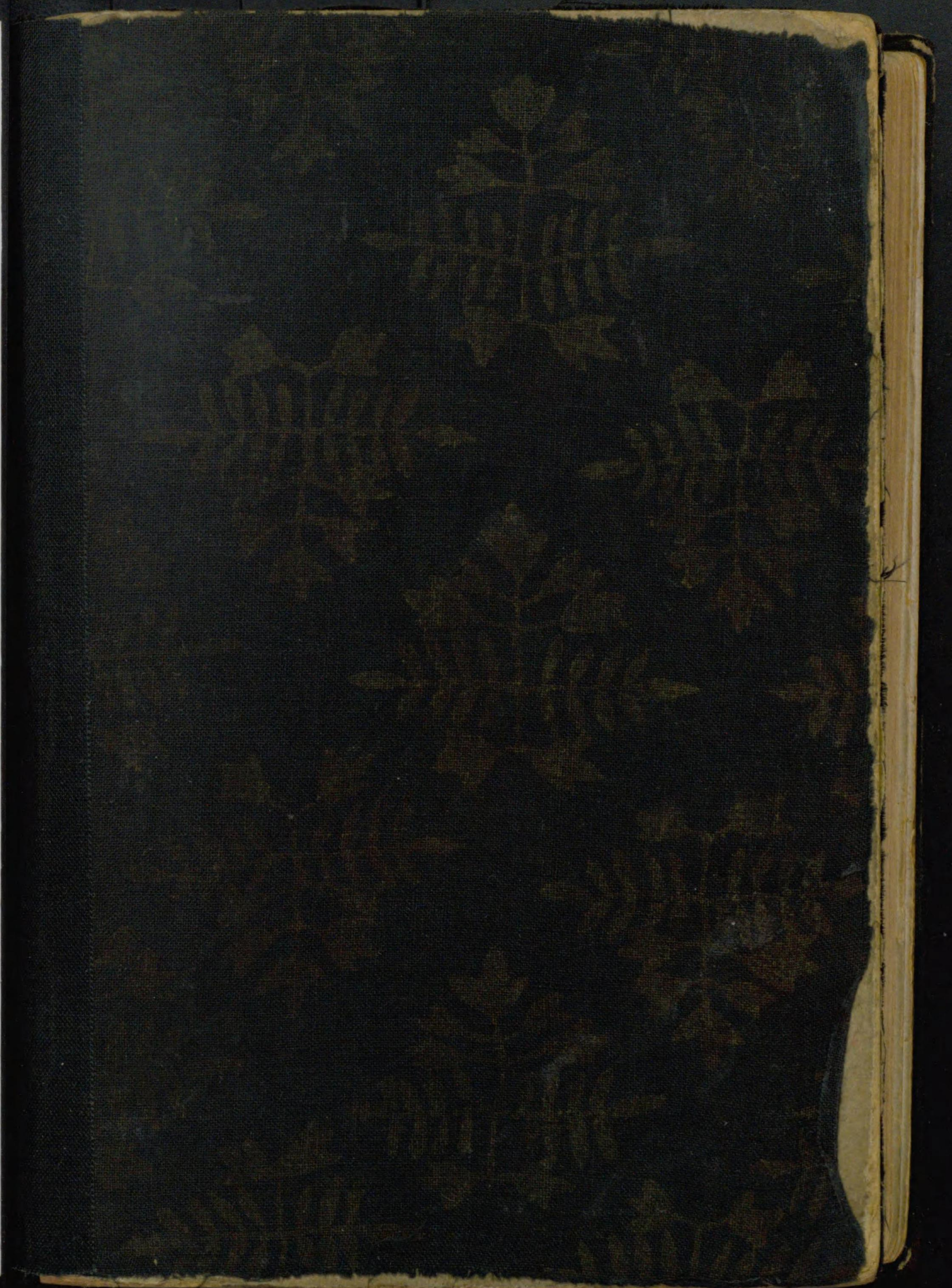
五十四

4年2月15日 93

中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中



589
40

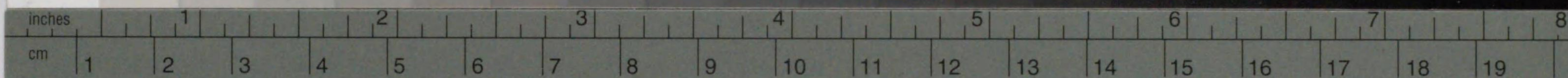


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

